

# デフリンピックの過去と現状

日本財団パラスポーツサポートセンター

パラリンピック研究会

---

紀要第24号(デフリンピック特別号)

June 2025

# パラリンピック研究会 紀要

## デフリンピック特別号

### 第24号

目 次

2025年6月

#### 研究論文

|                          |         |    |
|--------------------------|---------|----|
| 日本におけるデフスポーツの「現在地」 ..... | 齊 藤 まゆみ | 1  |
|                          | (英文要旨)  | 12 |
| デフリンピックの過去と現状 .....      | 小 倉 和 夫 | 13 |
|                          | (英文要旨)  | 48 |

#### 研究ノート

|                         |         |    |
|-------------------------|---------|----|
| 国際手話および主要国手話の相互比較 ..... | 小 倉 和 夫 | 49 |
|                         | (英文要旨)  | 63 |

#### 付録

|                   |         |    |
|-------------------|---------|----|
| デフリンピック関連資料 ..... | 中 村 真 博 | 65 |
|-------------------|---------|----|

|           |  |    |
|-----------|--|----|
| 執筆者 ..... |  | 87 |
|-----------|--|----|

# Journal of Paralympic Research Group

## Special Issue on the Deaflympics

**Vol.24**

*June 2025*

Contents

### Research Articles

|                                                  |                   |    |
|--------------------------------------------------|-------------------|----|
| The Current State of “deaf sport” in Japan ..... | SAITO Mayumi      | 1  |
|                                                  | (English Summary) | 12 |
| The Past and Present of the Deaflympics .....    | OGOURA Kazuo      | 13 |
|                                                  | (English Summary) | 48 |

### Research Note

|                                                                          |                   |    |
|--------------------------------------------------------------------------|-------------------|----|
| A Comparative Analysis of International Sign and National Sign Languages |                   |    |
| .....                                                                    | OGOURA Kazuo      | 49 |
|                                                                          | (English Summary) | 63 |

### Appendix

|                                            |                   |    |
|--------------------------------------------|-------------------|----|
| Materials related to the Deaflympics ..... | NAKAMURA Masahiro | 65 |
|--------------------------------------------|-------------------|----|

|               |  |    |
|---------------|--|----|
| Authors ..... |  | 87 |
|---------------|--|----|

# 日本におけるデフスポーツの「現在地」

齊藤まゆみ

(筑波大学)

## はじめに

デフリンピックは、デフアスリートを対象とした国際総合スポーツ競技大会である。1924年に設立された国際ろう者スポーツ委員会（フランス語表記 CISS : Comité International des Sports des Sourds ; 英語表記 ICSD : International Committee of Sports for the Deaf）が統括しており、パラリンピックやスペシャルオリンピックスよりも長い歴史がある。しかし、日本財団パラスポーツサポートセンターパラリンピック研究会の調査（2021）から、デフリンピックの国内認知度は16.3%であり、パラリンピック認知度の97.9%や、諸外国（アメリカ39.8%、ドイツ21.6%、韓国31.0%）のデフリンピック認知度と比較しても低いことが示されている。その背景として、デフリンピックが「ろう者のための、ろう者による運営」をモットーとしてきたことから、国内においては、スポーツ科学からも障害学からもデフリンピックの意義や価値を学術的に論じる機会が少なかったことが指摘でき、デフリンピックの歴史や意義に関する国内での研究報告は散見される程度である（砂田, 1996 ; 及川, 1998 ; 齊藤, 2011 ; 齊藤, 2012 ; 小倉, 2018 ; 小倉, 2024 ; Doll-Tepper, 2024）。なお、国際ろう者スポーツ委員会の表記は、設立当時のフランス語表記である CISS と英語表記である ICSD が混在して使用されていることから、本稿においても以降は、CISS/ICSD という表記（Doll-Tepper, 2024）を用いることとした。また、ここで言う「ろう者」とは、手話言語とろう文化を共有する人々のことを指す。CISS/ICSD は、デフリンピック出場にあたり、手話の使用と聴力の基準、そして加盟する国・地域のろう者スポーツ協会に所属することを定めている。

デフリンピックを統括する CISS/ICSD は、「ろう者は身体的な面では障害者ではない」と主張している。また、難聴という用語が生理学的な機能不全を表すのに対し、聴覚障害という用語は、それによって生じる様々な不自由、不便、日常生活上の問題を表していることから、本稿では固有名詞や引用箇所を除き「聴覚障害」ではなく、「ろう・

難聴」, それに対して難聴ではない人を指す場合は「聴者」と表記する。

## 1 デフリンピックが社会に与える影響

国際パラリンピック委員会が推進するパラリンピック・ムーブメントは、障害のある人となない人が平等に参加できるインクルーシブ社会の創造を目標として掲げているが、ろう・難聴アスリートはパラリンピックには出場しない。それは、CISS/ICSD がパラリンピックとの統合のプロセスから脱退しており（及川, 1998）、パラリンピックスポーツとは一線を画しているからである。しかし、この統合の議論以前から、ろう・難聴アスリートはオリンピックに出場し、競泳、飛込み、ボート、体操、陸上などの個人競技、レスリングやボクシング、フェンシングなどの対人競技、そしてバスケットボール、バレーボールなどのチームスポーツでメダリストを輩出するなど国際的に幅広く活躍している（齊藤, 2011; 齊藤, 2018）。このように、ろう・難聴アスリートはスポーツにおいて卓越したパフォーマンスを持ち、オリンピックでも聴者と対等に競うことができるにも関わらずデフリンピックが存在することの意味は何か。

国内に目を向けると、第25回夏季デフリンピック競技大会東京2025（以降、東京2025デフリンピック）が日本で開催される。日本では初開催となるデフリンピックは日本社会にどのような影響を与えるのであろうか。東京2025デフリンピック開催基本計画（2023）によると大会ビジョンとして3つが示されている（表1）。それらは、つなぐ、つながる、そして共生社会の実現という内容である。特に3に掲げている「誰もが個性を活かし力を発揮できる」共生社会の実現において、「大会開催を機に、デフリンピック・ムーブメントとして、デフスポーツやろう者の文化への理解を促進し、障害のある人となない人とのコミュニケーションや心・情報・街のバリアフリーをさらに推進すること」、「このムーブメントを通して、互いの違いを認め、尊重しあい、誰もが個性を活かし力を発揮できる共生社会づくりに貢献する」ことが具体的に記されている。スポーツを通した共生社会の創造という視点において、ろう・難聴のアスリートは、デフリンピックに対しどのような意義や価値を抱いているのだろうか。ろう・難聴者同士で競い合うことを重視するデフリンピックは、日本が初参加した1965年から半世紀以上経過しても国内の認知度は16%に過ぎず、国内のデフリンピック選手は、デフリンピックの認知度を高めたい（齊藤, 2012; Saito & Nakajima, 2024）と考えていることが示されている。そこで、国内におけるろう・難聴者のスポーツ活動の認知度が低い要因を考察するために、現状と課題について歴史的な経緯を含めて概観していくことにする。

表1 大会ビジョン

| 大会ビジョン                      |
|-----------------------------|
| 1 デフスポーツの魅力や価値を伝え人々や社会とつなぐ  |
| 2 世界に、そして未来につながる大会へ         |
| 3 “誰もが個性を活かし力を発揮できる”共生社会の実現 |

## 2 日本におけるろう・難聴者のスポーツ

国内のろう・難聴者を対象とした体育・スポーツに関する活動や研究は、1945年以降おもに聾学校の児童生徒を対象に継続して進められ、1952年には関東聾学校体育連盟が、1963年には全国聾学校体育連盟が結成されるなど聾学校の体育・スポーツ活動を活発にしてきた。日本の聾学校史における主要運動種目は、陸上競技、野球、排球、卓球であり、陸上競技は1964年に第1回の全国聾学校陸上競技大会を開催し、現在まで継続開催となっている。また、1965年には千葉県高等学校体育連盟に東京教育大学附属聾学校の陸上部が加盟し、当時高等部1年の遠藤宗志選手が100mと200mで入賞している。さらに遠藤選手は翌年以降も千葉県高等学校体育連盟主催の大会に出場し3年目には優勝、全日本陸上選手権大会でも決勝進出を果たしたという記録が残されている（東京教育大学附属聾学校、1975）。遠藤選手は全国大会予選を兼ねる千葉県大会で2位になったにも関わらず、全国大会には参加資格がないということで参加が認められなかった。この出来事は、当時の聾学校を含めた特殊教育諸学校（現：特別支援学校）の全国高等学校体育連盟主催競技会への参加資格に関する議論が起きる契機となった。その後、同連盟の内規が改正されたようで、1970年には、松山ろう学校が全国高等学校選手権大会（インターハイ）に出場したという記録が残っている。1964年に開催された東京パラリンピックは、第1部は国際身体障害者スポーツ大会（第13回国際ストーク・マンデビル競技大会）としてパラプレジア（Paraplegia；下半身まひ）の競技が、第2部は国内大会として車いす以外の肢体不自由者、視覚障害者、聴覚障害者の競技が行われた。そして第2部の国内大会は、翌1965年から全国身体障害者スポーツ大会として開催されるようになり、全国知的障害者スポーツ大会との統合を経て2001年に全国障害者スポーツ大会として現在に至っている。この全国障害者スポーツ大会には「聴覚障害」のカテゴリーがあり、ろう・難聴者も参加しており、国内では「障害者スポーツ」という枠組みで大会が行われている。また、ジャパンパラ競技大会の水泳競技には、パラリンピックの水泳競技にはない「聴覚障がい」のクラスがあることは日本の特徴である。

ろう・難聴者のスポーツも1964年の東京パラリンピック開催と並行して組織化され、1963年には日本ろうあ体育協会が結成された。日本ろうあ体育協会は CISS/ICSD にも加盟して国際サイレントゲーム（デフリンピック）の参加資格を備えることとなった。そして、1965年にワシントンで開催された国際サイレントゲームに日本は初出場を果たし、高山道雄選手がマラソンで銅メダルを獲得するなど、監督やコーチも含め聾学校関係者が活躍したが、国内での反響は大きくはなかった。

ろう・難聴者が行うスポーツは、国際的には大文字の D を使って表記される “Deaf Sports” とされ、日本語では平仮名表記の「ろうスポーツ」（砂田，1996；末森，1999）として、単なるスポーツ活動とは異なる意義があるという側面も指摘されている。しかし、日本ではデフリンピックに出場する選手でも、聾学校（現：聴覚特別支援学校）に在籍したことがない者や手話を使わない環境にいる者も存在しており（中村，2009；小倉，2018），必ずしも「ろうスポーツ」という意識を持って活動している訳ではないと推察される。また、スポーツをしている成人聴覚障害者像からは、「年齢・性別・職業に加え、聴力や失聴時期、学校歴、選択する障害の呼称など、多様な背景であること（齊藤・荒川，2014）」が示されており、「ろうスポーツ」とは異なる実態が示されている。そのため、国内では日本特有のデフスポーツという概念が存在していると考えられ、国内においてろう・難聴者が行うスポーツ活動のことを「デフスポーツ」とカタカナ表記で表すことで日本特有の「デフスポーツ」という概念を理解していくことにする。カタカナ表記のデフスポーツは、医学的に難聴の程度を表す deaf と競技スポーツに限定しない sport からなる “deaf sport” として扱うことが提案されており（齊藤・荒川，2014），これは、ろう者としてのアイデンティティ（木村・市田，1996；砂田，1996；末森，1999）に限定しない幅広いスポーツ活動を意味している。そこで、国内におけるデフスポーツ実施者の意識を把握することで、日本特有のデフスポーツの特徴を検討していく。

砂田（1999）によるとろう者にとってスポーツは2つの意味があるという。1つは聴者と対等に競うことができる数少ない場、つまり卓越性を競う競技スポーツという概念である。もう1つはろう者同士で競い合うことでライバル意識が醸成され、結びつきを強固なものとするというデフコミュニティという概念である。齊藤・荒川（2014）は、スポーツを行っているろう・難聴者を対象に、自己呼称と聴力、自己呼称と聾学校か通常校かという所属したコミュニティとしての学校歴との関連性を検討したところ、「ろう（あ）者」、「難聴者」、「中途失聴者」という自己呼称と聴力、自己呼称と学校歴とは関連がなく、どのような呼称を使うかは個人のアイデンティティの問題であると述べている。東京2025デフリンピック開催決定以降に実施したデフリンピック選手を対象とし

た調査（Saito & Nakajima, 2024）においても同様の結果を得ており、さらに「聞こえない人」という状態を表す表現や「他者に理解してもらうためにあえて聴覚障害を強調する」という新たな傾向も見られた。これは、大会ビジョンである共生社会の実現において、選手自身が「デフスポーツやろう者の文化への理解を促進し、障害のある人となし人とのコミュニケーションや心・情報・街のバリアフリーをさらに推進する」という意識の表れであろう。

門脇・齊藤（2017）は、インテグレーション（聴者の中に混ざった）環境で競技をしていた難聴アスリートがデフスポーツとの関わりを転換点として、デフアイデンティティの形成段階で聴者との対等な関わり的重要性に気づき、聴者との関わりから聞こえない自分を肯定し、「デフ選手」としての自覚が高まることを報告している。デフリンピックはオリンピックよりも競技力が低く、インテグレーション環境でのアスリートにとってデフスポーツに参加する意義をみいだせないのではないか（齊藤, 2012）という疑問もだされていたが、この研究からは競技性の高いアスリートのデフスポーツ活動には、競技者として聴者と対等でありたいと願う共通意識、デフリンピックという共通目標としてデフスポーツが持つ社会的価値の確信という3つの活動意義を有することが示されている。

及川（1999）は、スポーツにおけるノーマライゼーションという側面から、ろう者は、障害者が健常者スポーツに参加する先陣としての役割を果たしてきたことを指摘している。このように国内のろう・難聴者は、聴者同様にさまざまなスポーツ活動を行ってきたと考えられる。先述したように、当初国内では参加が認められていなかった全国高等学校体育連盟主催競技会への参加資格の他にも、プロアスリートのライセンス取得、トライアスロンを始めとする各種競技大会への参加など、「聞こえないから危険」という理由で排除されてきた歴史的経緯を、当事者たちがパフォーマンスを発揮することで「できる」ことを証明し、参加への門戸を開いてきたと言える。とはいえ、その参加形態は門脇・齊藤（2017）が示すように、あくまでもインテグレーションであり、合理的配慮という概念がなかった時代においては理不尽なものも数多く存在したようである。

### 3 ろう・難聴アスリートのパフォーマンス発揮を妨げる要因

難聴と聴覚障害についての法律上の定義をもとに、ろう・難聴であることがスポーツパフォーマンスに与える影響について検討していく。

聴覚障害は身体障害の一つとして位置づけられており、国内では身体障害者福祉法お

よび児童福祉法を基盤として施策が進められてきた。聴覚障害は、外耳から脳までのいずれかの部位に支障をきたすことによって聴覚の感度が低下した状態を示しており、その種類や程度、時期、文化的背景などによってさまざまな状況がある。種類としては伝音性難聴、感音性難聴、混合性難聴がある。

身体障害者福祉法施行規則別表第5号の規定は、「聴覚または平衡機能の障害」としており、そのうち聴覚障害は2, 3, 4, 6級に該当する。同規定によると、3級で「両耳の聴力レベルが90デシベル以上のもの（耳介に接しなければ大声を理解し得ないもの）」と表記されている。なお、デフリンピック出場資格とされるのは聞こえの良い方の耳でも55デシベル以上であることとされている。また、国際生活機能分類－国際障害分類改訂版（ICF：International Classification of Functioning, Disabilities and Health）による聴力障害程度の分類では、聴力90デシベル以下を難聴、91デシベル以上を最重度難聴としている。

障害の定義について、世界保健機構（WHO）は2001年にICFを提示した。このICFモデルでは、障害を生活機能というプラス面からみるように視点を転換し、すべての要素が相互に影響しあっていること、環境因子等の観点を加えたことが特徴である（図1）。特に、活動において、能力と実行状況を明確に区別しており、どちらか一方ではなくそれぞれで捉えることで、もし両者に差が生じていれば、その原因を明らかにすることで活動向上に向けた具体的な方策を検討できる。このICFモデルをスポーツで考えると、スポーツの実践者（個人）が存在し、スポーツは「できる活動」であるにも関わらず「実行していない」時に、その原因を明らかにし、具体的な方策を検討することで活動への参加を高めることができる。つまり、ICFモデルをもとにスポーツへの参加を制約する要因がどこにあるのかを明確にし、必要な方策を検討することができる。

国内では身体障害者とされるろう・難聴者であるが、外見からは障害が見えづらい。例えば、ろう・難聴者の体育・スポーツ活動時の行動の特徴として、教師の指示が分からない時でも、周囲の動きにあわせて内容をよく理解しないまま動くこと、聞こえないことを知られたくないことからあえて目立たず動く場合もあること、困ったことがあっても当事者からは要望しない傾向にあるため問題の所在がはっきりしないこと（齊藤, 2001）が指摘され、ろう・難聴者がスポーツ活動を行うことに対する聴者の理解や認識が高まらず、参加制限要因が多く存在すると考えられる。

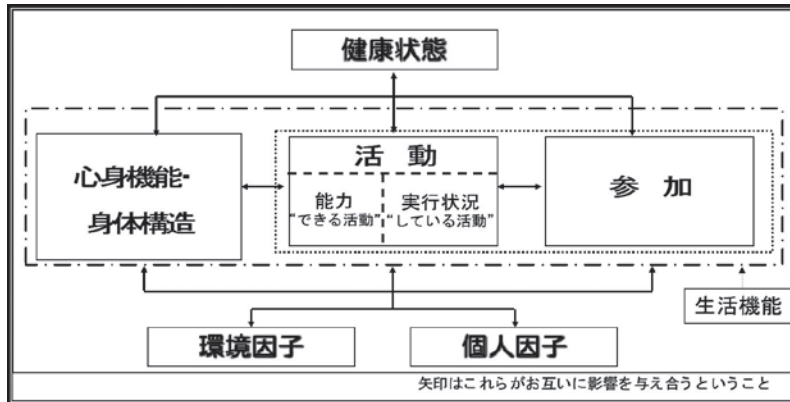


図1 国際生活機能分類－国際障害分類改訂版 ICF モデル

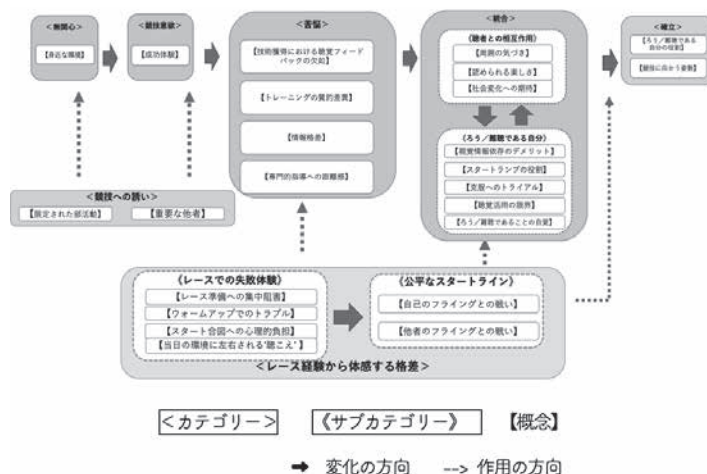
厚生労働省ホームページより著者一部加筆して作図

発育・発達段階（学齢期）における体力・運動能力は、難聴の有無にかかわらず運動経験の影響を受けることから、適切な運動経験の機会を得ることができれば体力・運動能力は高めることができるはずである。その後もろう・難聴に対する適切な支援のもとで継続した運動経験があり、系統だったトレーニング環境が得られることで優れた競技力を発揮できるようになる。それでは日本であらう・難聴のオリンピック選手が出現しないのはなぜなのだろうか。ICF モデルにおいて、活動に着目すると、能力としては“できる活動”であるにも関わらず、実行状況として“している活動”ではない、つまり難聴に起因する二次的要因として活動・参加における制約があると考えられる。

日本版 FTEM（衣笠他, 2019）の枠組みは、日本でも戦略的に取り組まれるようになったアスリートパスウェイである。これは F（Foundation, F1-F3）、T（Talent, T1-T4）、E（Elite, E1-E3）、M（Mastery）の11段階で構成されており、長期的な視点からアスリート育成を検討することができる。齊藤・宗田（2013）は、学齢期において体力・運動能力テストの成績が高い難聴児は身体活動量が多いことを明らかにした。また、継続した運動経験が有る場合は、視覚情報優位で運動調整が可能であり、運動場面での難聴に対する支援が運動調整に有効であることも示されている（齊藤, 2019）。このようにスポーツパフォーマンスは運動経験との関連が強く、難聴に対する適切な支援があり運動経験が保証される環境があれば高度な競技パフォーマンスを発揮できるようになると考えられる。しかし、海外ではオリンピックメダリストも複数確認されている（齊藤, 2018）にも関わらず、国内ではろう・難聴のオリンピックは未だ出現していない。このことから、現状ではろう・難聴者を取り巻く国内のスポーツ環境には障壁がある。

オリンピックへの出場は果たしていないが、国内でも日本選手権など国内最高峰の競

技会において上位で戦うアスリートは存在する。そのアスリートたちはろう・難聴であることに関連する様々な経験を通して競技における自己の存在意義を確立しているはずである。そのトップアスリートへのプロセスが明らかになれば、ろう・難聴者にとってのデフスポーツの意義を検討する上での貴重な示唆になる。そこで齊藤（2020）は、質的研究をもとに、競技スポーツにおいて難聴アスリートのパフォーマンス発揮を妨げる要因を検討し、難聴スプリンターにおけるトップアスリートへのプロセスは、無関心、競技意欲、苦悩、統合、確立という5つの段階があることを明らかにした。そして、カテゴリー相互の関係を中心として、難聴スプリンターが、一般の競技会で走ることの意義を見出してトップアスリートとしての自己を確立するプロセス全体の流れをストーリーラインとして描き出した（図2）。



難聴スプリンターがトップアスリートとしての自己を確立するプロセスの起点は、学齢期に走ることが身近な環境があることから始まる。まだ競技としての陸上を意識していない「無関心」の時期である。そのなかで、走るのが速かった、勝てて楽しかったという「成功体験」が、例えば聾学校での【限定された部活動】や本格的な競技へと誘う【重要な他者】の存在の影響で、＜競技意欲＞を形成した。しかし、競技力向上を求めて進んだ一般の環境では、難聴であることが理解されず、健聴者との間にさまざまな障壁があり、周囲に理解されない壁との間で＜苦悩＞が生じる。それらは競技会における《レースでの失敗体験》ともあいまって【専門的指導への距離感】を感じつつ、自分がどのように競技力向上に向き合っていけば良いか苦悶していく。一方で、通常の環境で練習することによる競技力の高まりは、難聴のアスリートであると同時にデフアスリートとして世界で競技する経験にもつながり、《ろう/難聴である自分》と《聴者との相互作用》という自己の＜統合＞で揺れ動くが、＜レース経験から体感する格差＞として、レースにおけるフライングへの不安がもたらす様々な経験を通して《公平なスタートライン》とは何かを前向きに捉えるようになる。これらのプロセスを経て、【ろう/難聴である自分の役割】を認識し、【競技に向かう姿勢】として自分はどうかという難聴スプリンターとして競技会で走る自己の意義を＜確立＞していく。

図2 難聴スプリンターにおけるトップアスリートへのプロセス結果図とストーリーライン

齊藤（2020）より引用・一部著作作図

さらにデフリンピアンを対象とした調査において、陸上競技以外のバドミントン、バレーボール、卓球、バスケットボール、サッカー、フットサルなどの競技においてもこのプロセスで説明できるとしている (Saito & Nakajima, 2024)。これらの研究結果をもとに、競技スポーツにおけるろう・難聴者のパフォーマンス発揮に対する障壁を検討したところ、アスリートとしてスタートラインに立つ前に、様々な障壁が可視化された。

まず、ろう・難聴児に＜競技意欲＞が芽生える段階において、＜重要な他者＞として身近な指導者やロールモデルとなる憧れの選手の存在が必要であることが示された。日本版 FTEM では F 段階に相当し、土台となる遊び・動作・スポーツへの参加と継続が保障されること、つまりろう・難聴であってもスポーツができる機会として身近な環境が保障されること、ろう・難聴児がスポーツをしたい、続けたいと思える環境、適切な指導を行うことができる指導者の存在が必要であるが、現状では選択肢の限定や指導者・支援者がいないなどニーズに応えられていない。続いての T 段階でも、専門的指導への障壁があった。聴者と同じ場所で同じトレーニングをしたとしても、実際はトレーニングでの質的差異があり、指導者がその場においても、専門的指導を受けられていないという現状である。専門性の高いコーチングを望んでいるにもかかわらず、聴者のために作られた環境に適応するために、助けを求めることを避けるようになることも示されている。一方で、デフスポーツではコミュニケーションへの負担を感じない居心地の良さや分かり合える楽しさという存在意義が語られている (門脇・齊藤, 2017; Saito & Nakajima, 2024)。しかし E 段階になるとスポーツをするうえでの自己の「難聴であること」が客観視できるようになり、聴者との相互作用に向き合うようになり、競技スポーツにおける自己の立ち位置を探る＜統合＞へのプロセスが始まる (齊藤, 2020; Saito & Nakajima, 2024)。また、競技力の高まりに伴い、デフスポーツからもハイパフォーマンスアスリートとして認識され誘いがかかるようになる。デフスポーツで日本代表として競技する機会を得ることは、自己を必要とする環境や認められる経験をすることであり、その経験が自己肯定感を高めることにつながると同時に、ロールモデルとしての役割があることに気づいていく。このようにデフスポーツには、同志としての居心地の良い場、自己実現としてのパフォーマンス発揮をする場、そして、ろう・難聴アスリートとしての社会的役割という価値や意義がある。

## 4 まとめ

国内におけるデフスポーツの「現在地」を検討したところ、ろう・難聴者はスポーツへの多様な関わり方をしており、日本独自のデフスポーツという概念の存在が示唆され

た。東京2025デフリンピックが掲げるビジョンであるスポーツを通じた共生社会の実現のためには、ろう・難聴アスリートが経験している目に見えない障壁に対する認識を高める必要がある。そのためには、デフスポーツを見る、知る、関わることを通して、気づかない・見えない障壁に気づきそれらを可視化していくことと同時に、ろう・難聴者のニーズが満たされるように、ろう・難聴者も含む誰もがアクションをおこしやすい環境へと変容していくことが望まれる。

## 文献

- 一般財団法人全日本ろうあ連盟・東京都・公益財団法人東京都スポーツ文化事業団（2023）「東京2025デフリンピック大会開催基本計画（2023年11月22日公表）」2025年3月5日取得，[https://deaflympics2025-games.jp/main-info/about/pdf/deaf\\_foundation-plan.pdf](https://deaflympics2025-games.jp/main-info/about/pdf/deaf_foundation-plan.pdf).
- 及川力（1998）「国際ろう者スポーツ委員会が国際パラリンピック委員会を離脱した要因について」『スポーツ教育学研究』18(1)，49-54.
- 及川力（1999）「聴覚障害者がスポーツの世界で成し遂げてきたこと」『いくおーる』31，8-11.
- 小倉和夫（2018）「デフリンピックの歴史，現状，課題及びパラリンピックとの比較」『日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要』8，1-16.
- 小倉和夫（2024）「デフリンピックの選手像—報道分析—」『日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要』22，49-59.
- 門脇翠・齊藤まゆみ（2017）「聴覚障害のある競技者とスポーツとの関わり—デフスポーツに対する意識変容過程に着目して」『アダプテッド体育・スポーツ学研究』3(1)，11-14.
- 衣笠泰介・船先康平・藤原昌・Elissa Morley・Jason Gulbin（2019）「我が国のスポーツとアスリート育成における国際的な包括的枠組みの適用」『日本版 FTEM』の開発」*Journal of High Performance Sport* 4, 127-140.
- 木村晴美・市田泰弘（1996）「ろう文化宣言 言語的少数者としてのろう者」『現代思想』24(5)，8-17.
- 齊藤まゆみ（2001）「聴覚障害学生の体育実技における視機能の現状と問題点」『スポーツ教育学研究』20，265-268.
- 齊藤まゆみ（2011）「聴覚障害者の体力・運動能力と視機能」『障害者スポーツ科学』9(1)，3-14.
- 齊藤まゆみ（2012）「デフリンピック競技映像を視聴したアダプテッド・スポーツに関心のある体育専攻学生が指摘する競技の特徴」『筑波大学体育系紀要』35，103-109.
- 齊藤まゆみ・宗田光博（2013）「聴覚特別支援学校在籍児の身体活動量と体力・運動能力との関連性」『筑波大学体育系紀要』36，69-75.
- 齊藤まゆみ・荒川歩美（2014）「日本における成人聴覚障害者のスポーツ活動に対する意識とその現状」『筑波大学体育系紀要』37，93-99.
- 齊藤まゆみ（2018）「聴覚障害のある人のためのスポーツ」齊藤まゆみ編『教養としてのアダプテッド体育・スポーツ学』（pp.6-9）大修館書店.
- 齊藤まゆみ（2019）「難聴者において運動経験が情報提示によるリズムに同期したステップ運動の遂行に及ぼす影響」『体育学研究』64(1)，205-211.
- 齊藤まゆみ（2020）「競技スポーツにおいて難聴選手のパフォーマンス発揮を妨げる要因—難聴短距離選手におけるトップアスリートへのプロセスより—」『アダプテッド・スポーツ科学』18(1)，13-25.
- 末森明夫（1999）「ろう者の社会生活」中野善達・吉野公喜編『聴覚障害の心理』（173-188）田研

出版.

砂田武志 (1996) 「ろう者とスポーツ」『現代思想 4 月臨時増刊号』 青土社.

砂田武志 (1999) 「ろうスポーツ」『いくおーる』 31, 12-14.

世界保健機関 (2001) 「国際生活機能分類—国際障害分類改訂版 (ICF : International Classification of Functioning, Disability and Health) 日本語版」厚生労働省. 2025年 3 月 5 日取得, <https://iris.who.int/bitstream/handle/10665/42407/9241545429-jpn.pdf?sequence=313&isAllowed=y>

東京教育大学附属聾学校 (1975) 「東京教育大学附属聾学校の教育—その百年の歴史—」東京教育大学附属聾学校.

中村有紀 (2009) 「デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書」筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター.

日本財団パラリンピック研究会 (2021) 「国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心 (2021年) 【国際比較編】」『日本財団パラスポーツサポートセンター』 2025年 3 月 5 日取得, <http://para.tokyo/InternationalComparison21.pdf>

Doll-Tepper, Gudrun. (2024). Deaf Sport and Deaflympics: Historical and current developments. *Journal of Paralympic research Group* 24, 23-45.

Saito, M., & Nakajima, Y. (2024). How Japanese Deaflympian became involved in Deaf sport: The athletic pathways to becoming top deaf athletes. In *16th Asian Society for Adapted Physical Education and Exercise Symposium Abstracts* (p.116).

# The Current State of “deaf sport” in Japan

SAITO Mayumi

(University of Tsukuba)

How will the Tokyo 2025 Deaflympics, the first-ever Deaflympics to be held in Japan, impact Japanese society? Despite Japan's participation in the Deaflympics for over half a century, public awareness remains as low as 16%. Deaflympic athletes in Japan seek to enhance recognition of the event. To examine the factors contributing to the low awareness of sports activities among Deaf/hard of hearing individuals in Japan, this study provides an overview of the current state and challenges, incorporating historical perspectives, and explores the present status of deaf sport.

The findings indicate that sports activities for Deaf/hard-of-hearing individuals in Japan are actively conducted not only within schools for the deaf and Deaf communities but also in integrated environments. These diverse forms of participation suggest the existence of a uniquely Japanese concept of “deaf sport,” characterized by flexible connections with the Deaf community.

Using the ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health) model and the FTEM (Foundations, Talent, Elite and Mastery) framework, this study visualized the barriers faced by Deaf/hard of hearing athletes at different stages of their athlete pathway. The process toward becoming a top athlete involves five stages: indifference, desire to compete, struggle, integration, and establishment. Barriers such as limited opportunities and access to specialized coaching were identified, highlighting the need to raise awareness of the invisible barriers experienced by these athletes.

# デフリンピックの過去と現状

小倉和夫

2025年11月15日から26日にかけて、東京2025デフリンピック大会が開催される。これは、日本で初めて開催されるデフリンピック大会である。本論文は、筆者が過去にパラリンピック研究会紀要に発表した複数の論文に大幅な加筆修正を加え、改めてデフリンピックの過去と現状について考察を加えたものである（末尾引用文献：小倉，2018；小倉，2023；小倉，2024）。

## 1. ろうあ者と聴覚障害者

デフリンピックとは「聴覚に障害のある人」の国際スポーツ大会であり、オリンピック、パラリンピック、スペシャルオリンピックスと並んで、国際オリンピック委員会がオリンピックという冠をつけることを正式に認めた国際競技大会とされている（内閣府，2023，p.130）。

学問的には、聴覚障害学という言葉が通常使われており、また、厚生労働省の統計などでも、「聴覚・言語障害者」が、身体障害者の一分類として使用されている（たとえば、厚生労働省の「身体障害児・者実態調査」などでは、聴覚障害者も身体障害者の一部として取り扱われている）。

しかし、障害者のオリンピックともいわれるパラリンピックには、聴覚障害者は参加していない。さらに、全国障害者スポーツ大会では、陸上、水泳、アーチェリー、卓球、フライングディスクの競技に聴覚・平衡機能障害、言語障害者の参加が認められているが、同時に、全国ろうあ者体育大会が存在する。

このように、スポーツあるいは福祉に関連する分野に限っても、「聴覚障害者」の定義は明確とは言い難く、とりわけ、「ろう者」という概念と聴覚障害者の概念の違いについて、ややもすると混乱を招きがちである。

しかし、近年、手話言語条例の広がりもあって、耳の聞こえない者あるいは、聴覚障害者という概念と「ろう者」という概念の違いが強調されるようになった。すなわち、

ろう者とは、「日本手話という、日本語とは異なる言語を話す言語的少数者である」（木村・市田，1996）といわれるようになった。こうした概念を用いることによって、聴覚障害者を医学的、身体的障害を持つ者とする見方から、言語的な意味での社会的少数者とする見方へ転換させようとしていると言えよう（ちなみに、英語では、小文字の deaf と大文字の Deaf を区別し、後者をもって、日本における「ろう者」の概念にほぼあてはまる概念とする場合が多い）。

聴覚に困難を有する者を表す用語は複数あり、スポーツ大会や団体の名称においても、「全国ろうあ者体育大会」「アジア太平洋ろう者競技大会」「一般社団法人日本デフ陸上競技協会」というように、異なる用語が用いられている。本稿では、依拠したデフリンピック報告書において、選手当事者によって最も多く使われていた「ろう者」で統一した。ただし、固有名詞に関してはこの限りではない。

ちなみに、耳の不自由な人を身体障害者として見ず、一般社会における言語的少数者としてみるという見方は、文化人類学上著名な著作 *Everyone Here Spoke Sign Language*（日本語版書名『みんなが手話で話した島』）（Groce, 1985）を読めば、その社会的意味が容易に理解できよう。この書物は、米国北西部、マアチューセッツ州の沖合に浮かぶマーサズヴィンヤードという島の物語である。そこでは20世紀のはじめころまで、圧倒的多数の住民が耳の聞こえない人であったため、島におけるコミュニケーションは全て手話で行われており、手話のできない健聴者は、いわばコミュニケーションのできない障害者であったというのである。この島の物語は、聴覚障害が医学的問題を越えて、実は社会的問題であることを示唆していると言えよう。

## 2. 聴覚障害の特質と対応

広い意味での身体障害は、多くの場合可視化される。いわゆる身体障害は義手、義足、車いすなどによって可視化され、視覚障害も通常の場合、見た目によって（たとえば動作や白杖によって）認知される。しかし、聴覚障害は、対人関係において会話しないう限り、一見障害は「見えない」。その結果、補聴器などの導入には、いわゆるスティグマ現象への抵抗、すなわち、そうした障害を可視化する用具を装着することへの躊躇が生まれがちである（藤間・鈴木・小淵，2021，p.223）。

こうしたスティグマは、裏をかえせば、聴覚障害者が、「外見＝身体性による順序付けを拒否」すること（石川・長瀬，1999，p.162）へとつながる。言い換えれば、聴覚障害者における障害の克服は、障害者本人の努力や工夫（補助用具の使用など）だけによるとはいえない側面が強くなりがちである。すなわち、聴覚障害者に対する「バリア

フリー」化は、音声言語の価値、あるいは社会一般が持っている価値観の組み替え（白井, 2001, p.92）によってのみ可能となる。具体的には健聴者も含めた手話の普及といった対応が必要という考え方もあろう。しかし、そのいわば前段階として、聴覚障害者とのコミュニケーションの環境に物理的配慮を行うことが必要となろう。たとえば、「騒音がなく反響の少ない明るい部屋を選ぶ」「話し手の顔が暗がりにならないよう光源を背負う席に座る」「相手に近づく」など、補聴機器が苦手とする騒音、反響、距離の悪条件を減らし、さらに視覚情報を十分得るための光の活用といった対応が必要であろう（石川・長瀬, 1999, p.229）。

### 3. 聴覚障害者とスポーツ活動

義手、義足、車椅子などを使用する、いわゆる身体障害者にとっては、運動あるいはスポーツ活動は、いわゆるリハビリの一環としての意味を持ち、同時に、身体能力の復活あるいは障害の克服という意味を持ちうる。このことは、パラリンピックの原点が、脊髄損傷者のリハビリにあったことから明らかである。

しかしながら、聴覚障害者にとって、スポーツがいかなる意義や効果を持ちうるかについては、必ずしも自明ではない。特に、別表のとおり、オリンピックに出場した聴覚障害者もかなりの例があり、それから類推すれば、聴覚障害者にとってのスポーツの意義や効果は、健常者とさして違わないとみる意見があっても不思議ではない。

表1 オリンピック競技大会へ出場した聴覚障がい者アスリート（例示）

| 氏名                  | 国・地域   | 競技                    | オリンピック出場年、成績                                                               | デフリンピック出場年       |
|---------------------|--------|-----------------------|----------------------------------------------------------------------------|------------------|
| Oskar WETZELL       | フィンランド | 飛び込み                  | 1908ロンドン, 1912ストックホルム                                                      |                  |
| Gertrude EDERLE     | アメリカ   | 水泳                    | 1924パリ 4×100m自由形リレー金, 100m自由形銅, 400m自由形銅                                   |                  |
| Angel ACUNA LIZANA  | メキシコ   | バスケットボール              | 1948ロンドン 4位                                                                |                  |
| Ignazio FABRA       | イタリア   | レスリング<br>グレコローマンフライン級 | 1952ヘルシンキ銀, 1956メルボルン銀, 1960ローマ5位, 1964東京4位                                | 1961, 1965, 1969 |
| Ildiko REJTO-UJLAKI | ハンガリー  | フェンシングフルーレ            | 1960ローマ団体銀, 1964東京個人金, 団体金, 1968メキシコ個人銅, 団体銀, 1972ミュンヘン団体銀, 1976モントリオール団体銅 |                  |
| Susan PEDERSEN      | アメリカ   | 競泳                    | 1968メキシコ 4×100m自由形リレー金, 4×100mメドレーリレー金, 100m自由形銀, 200m個人メドレー銀              |                  |
| Gerhard SPERLING    | 東ドイツ   | 20km 競歩               | 1964東京, 1968メキシコ 5位, 1972ミュンヘン4位                                           | 1961, 1969, 1977 |

| 氏名                     | 国・地域    | 競技                          | オリンピック出場年、成績                                                                  | デフリンピック<br>出場年                     |
|------------------------|---------|-----------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------|
| Vyacheslav SKOMOROKHOV | ソ連      | 400mハードル                    | 1968メキシコ 5 位                                                                  | 1965, 1969,<br>1973, 1977          |
| George MASIN           | アメリカ    | フェンシング                      | 1972ミュンヘン, 1976モントリオール                                                        |                                    |
| Jeffrey FLOAT          | アメリカ    | 競泳                          | 1984ロサンゼルス 4 × 200m<br>リレー金, 200m自由形 4 位                                      |                                    |
| Piero ITALIANI         | イタリア    | 飛び板飛び込み                     | 1984ロサンゼルス 6 位                                                                |                                    |
| David WHARTON          | アメリカ    | 競泳                          | 1988ソウル 400m 個人メド<br>レー銀, 1992バルセロナ 400<br>m 個人メドレー 4 位                       |                                    |
| Dean Bryan SMITH       | オーストラリア | 10種競技                       | 1992バルセロナ                                                                     | 1985, 1989,<br>1993, 2005          |
| Jueri JAANSON          | エストニア   | シングル, ダブル<br>スカル            | 1988ソウル, 1992バルセロナ<br>5 位, 1996アトランタ,<br>2000シドニー 6 位, 2004年<br>アテネ銀, 2008北京銀 |                                    |
| Terence PARKIN         | 南アフリカ   | 競泳                          | 2000シドニー 200m 平泳ぎ<br>銀, 400m 個人メドレー 5 位                                       | 1997, 2001,<br>2005, 2009,<br>2013 |
| Frank BARTOLILLO       | オーストラリア | フェンシング                      | 2004アテネ                                                                       |                                    |
| Hugo PASSOS            | ポルトガル   | レスリンググレコ<br>ローマン            | 2004アテネ                                                                       | 1997, 2001,<br>2005, 2009,<br>2013 |
| Tamika CATCHINGS       | アメリカ    | 女子バスケット<br>ボール              | 2004アテネ金, 2008北京金,<br>2012ロンドン金, 2016リオ<br>金                                  |                                    |
| Norbert KALUCZA        | ハンガリー   | ボクシング フラ<br>イ級              | 2008北京                                                                        |                                    |
| Maria Belen DUTTO      | アルゼンチン  | BMX (バイシクル・モトクロス)<br>サイクリング | 2008北京                                                                        |                                    |
| Chris COLWILL          | アメリカ    | 飛び板飛び込み                     | 2008北京男子シンクロ 3 m<br>板飛び込み 4 位, 2012ロ<br>ンドン                                   |                                    |
| Fausto QUINDE          | エクアドル   | 50km 競歩                     | 2008北京                                                                        |                                    |
| David Michael SMITH    | アメリカ    | 男子バレーボール                    | 2012ロンドン                                                                      |                                    |

出典：筑波技術大学「デフリンピック啓発パネル」を参考に、パラリンピック研究会作成  
[http://deafstudies.jp/info/files/deaflympics\\_deaf\\_athletes.pdf](http://deafstudies.jp/info/files/deaflympics_deaf_athletes.pdf) (2017年9月25日)  
 ICSD <http://www.deaflympics.com/athletes.asp> (2018年1月15日)

ここで、聴覚障害者にとってのスポーツの意義を考えるための視点として、他の種類の障害をもつ人々と比較してみたい。藤田が行った調査（全国障害者スポーツ大会参加者を対象とした調査，2010年）（藤田，2013，p.132）を参考に調べると，次のような特徴が浮かび上がる。

大会参加による身体的効果あるいは影響についての見方を評価するため，体力・身体機能が向上したと回答した聴覚障害者は，身体，視覚障害者に比べて若干高かった。同様に，心理的影響についての質問である「ストレスが解消されたか」についても，同じように，聴覚障害者の数値は比較的高かった。また，藤田は，社会的効果として「周囲の理解が向上した」という効果が認められたという。こうした結果をみると，スポーツ活動が聴覚障害者に与える影響は，他の種類の障害者と比べると，健常者の場合の影響

に近いのではないかと推測も成り立ちうるであろう。

他方、成人障害者の約30%は、平衡機能が低下していると言われる（中島・天野，p.168）。そうとすれば、平衡感覚が重要なスポーツ活動、たとえば体操などについては、聴覚障がいとの関係についてさらなる検討が必要かと思われる（注1）。

また、男性230人、女性90人のスポーツを行っている聴覚障害者を対象として行われたアンケート調査によれば、スポーツを行う目的としては、健康・体力づくり（180人）、気晴らし（149人）、仲間との交流（129人）が特に多く指摘されている（複数回答可）（五町，2010）。

また、デフスポーツ団体協議会に加入する競技団体の会員341人を対象に行った調査によれば、スポーツを行う目的については、健康・体力づくりが182人、気晴らしが147人、仲間との交流が127人（複数回答可）となっている（齊藤・荒川，2014）。

他方、スポーツ活動を行う上での困難については、前掲の藤田の調査によれば、物的側面（施設の有無）、人的側面（指導者不足）の双方において、聴覚障害者その他の種類の障害者との間に、有意な違いは見出されていない（藤田，2013）。

この関連で、藤田の調査は、スポーツ開始時において影響を与えた「他者」についても行っているが、ここでは、他の障害者に比べ、聴覚障害者の場合は、家族、学校の教師の役割が大きく、友人、医療関係者、施設関係者などの役割の比較的大きい身体障害者とかかなり際立った対照を示している（藤田，2013，p.156-157）。この点を、上記の「周囲の目が気になる」という反応が比較的大きいことと考えあわせると、聴覚障害者の場合には、日常接触している人の勧め、意見がスポーツ活動参加にとって特に重要であると見ることもできよう。

中村有紀が中心となって、台北デフリンピック大会への選手候補者（以下選手）について行ったアンケート調査（中村，2009）によれば、スポーツ競技を始めたきっかけについては、39.7%の選手が自らやりたかったからだとしており、家族や友人の勧めによるとした者（49%）にかなり近い数値となっている。これは、藤田の調査対象者はろうあ者体育大会参加者であるのに対して、中村の調査の対象は、より競技性の強いデフリンピック大会選手であることにもよると思われる。また、中村の調査では、競技スポーツに参加する目的について、健康維持やストレス解消をあげたものは全体の3割程度であり、圧倒的多数の者が、競技力をあげていることも、同じような理由によるものと思われる。また、スポーツ活動の上で困難を感じた点（苦勞した点）については、68.9%の者が費用（財政的困難）を挙げていることが注目される。

なお、中村の調査における、健常者とのコミュニケーション上の困難についての自由記述によると、手話を活用しても、健常者とのコミュニケーションが十分とれないとの訴えが稀ではないことがわかる。たとえば、次のような点が指摘されている。

- ・手話通訳を介すると伝わらない部分あるいはズレや意志疎通のズレが生じる。
- ・一対一なら筆談などいろいろ工夫ができるが健常者の集団の中でのコミュニケーションは難しい。
- ・手話によるコミュニケーションは時間がかかる。
- ・手話は全国共通ではないので、読み取れない手話も多い。
- ・専門用語の手話に問題がある。

なお、聴覚障害者のスポーツ活動参加を促す制度的要因の一つとして、地域レベルにおける競技大会への参加資格の問題を指摘する向きもある。すなわち、都道府県や市町村といった地域レベルにおいては、障害者スポーツ競技大会への参加資格をできるだけ広げ、障害の程度の軽い人々の参加を促すことが重要という見方があることである。事実米国などでは、地域と国レベルでは競技大会への参加資格が異なり、国レベルになると、障害の程度の設定がより厳しくなり、それだけ「競技性」が重視されるが、地域レベルでは参加重視の観点から、基準が厳しくないと言われる（Stewart, 1991, p.22）。

#### 4. デフスポーツ活動における困難とその克服

スポーツ活動においては通常、スタートの合図や審判の警告、さらには選手同士の連携などが音声で行われる。しかし、聴覚障害者にとっては、こうした音声によるコミュニケーションに困難があるため、競技によっては困難が生じる。どのような困難があるか、また、それにどのように対応しているかについて、スポーツ報道を中心に、競技別に調べた結果は次のとおりである（小倉，2019，p.27-29）。

##### 陸上競技

- ・指導者の指示が聞きとりづらいこと。ライバルの足音や息遣いが聞こえないため、距離感がつかみづらいこと（『朝日新聞』2017年7月11日石川全県朝刊）。
- ・健常者は足音でリズムをつかむが、聴覚障害者はそれがなく、リズムをつかみ難い（『朝日新聞』2017年7月14日茨城1地方朝刊）。
- ・リレーでは声や足音をたよりに走者間のバトンタッチを行えないので、あらかじめ

走者の歩幅を計測し、その時点を確認して走りだす工夫をする（『朝日新聞』2017年7月31日東京朝刊）。

- ・スタートの合図は、ランプで知らせようになっている（『朝日新聞』2017年7月28日東京夕刊）。

#### 水泳競技

- ・スタート時のピストルの合図の代わりに、選手のスタート位置にランプを置き、光でスタートを知らせるように工夫されている（中島・天野，2019，p.7）。

#### サッカー

- ・選手は大きな身振りでパスを要求したり手話を使ってプレーする。また監督は、ボードに文字を書いて指示を出す（『読売新聞』2018年6月13日西部朝刊）。
- ・通常の2，3倍周りを見ないといけない（『読売新聞』2022年4月20日東京夕刊）。
- ・審判は笛に加えて旗をふる（『読売新聞』2021年2月25日大阪朝刊）（『朝日新聞』2017年7月28日東京夕刊）。
- ・選手はお互いの目を見て確認しあう（『朝日新聞』2017年7月8日ちば首都圏1地方朝刊）。

#### バレーボール

- ・審判は笛などの音声を光や旗などを使って可視化している。また選手はアイコンタクトや小さなサインを使って意志疎通をはかる（『読売新聞』2022年4月20日東京朝刊）。
- ・スパイクやサーブの音で球の威力を予測したり、ボールを誰がとるかを声で確認したりできないという困難がある（『朝日新聞』2017年7月27日東京朝刊）。
- ・初めのうちは聞き取ろうと集中しすぎて頭痛をおこした。（慣れてきてから）相手の動きや振りに目を凝らすことにより、音に頼ってスパイクの強さを判断できない点を補っている（『朝日新聞』2017年7月29日東京朝刊）。

#### バスケットボール

- ・音だけでなく、審判は旗を振って指示をだす（『朝日新聞』2019年1月11日佐賀全県朝刊）。
- ・ホイッスルの音がした場合には、視覚的に分かりやすく多くの選手の視界に頻繁に入るゴールバックボードにLEDランプを配置することで、わかりやすくしている

(中島・天野, 2019, p.7)。

- ・審判は「待て」と告げるのではなく、選手の肩をたたく（『読売新聞』2022年7月6日）東京朝刊）。

## テニス

- ・打球音は次のプレーのための重要な情報だが、最初は感覚がつかめず戸惑ったが、その分ボールをよく見るようになった（世界デフテニス選手権大会のメダリスト菰方里菜選手の言葉）（『読売新聞』2021年1月11日中部朝刊）。

## 自転車競技

- ・ギアチェンジやペダルを踏み込む際の音、背後からくる選手の息遣いなど健常者のトップ選手達はかけひきの判断材料にしているが、ろうあ者はこれができない不利がある（トルコ大会のクロスカントリーの銅メダリスト早瀬久美選手の言葉）（『読売新聞』2021年9月5日東京朝刊）。

## ボート

- ・「こぎ出す」「ストップ」「前を見る」など9つのハンドサインを考えて実行（琵琶湖のレガッタに出場したろうあ学校の教諭の言葉。なおデフリンピックにはボート競技はない）（『朝日新聞』2022年5月19日大阪朝刊）。

## ボブスレー（2人あるいは4人乗り）

- ・同乗の選手とタイミングを合わせるのに、普通は声でおこなうが、聴覚障害があるので、普段から唇やしぐさでカバーしている（チェコのヤブク・ノセク選手の言葉）（『朝日新聞』2022年2月21日東京朝刊）。

## カーリング

- ・あらかじめチーム内で決めたハンドサインでスキップが指示を出し、スウィーパーがそれをみながら動く（『朝日新聞』2019年12月17日朝刊）。

## ハンマー投げ

- ・森本選手は、五輪選手の室伏氏のやり方を学ぶため、室伏選手の映像を作成してもらい、スピーカーに手を触れて振動によってリズム感覚をつかむ練習をした（『毎日新聞』2012年7月5日大阪朝刊）。

## ゴルフ

ゴルフについては、競技団体の「日本デフゴルフ協会」が、自らのHPに次のように「ゴルフする時のハンディ」として聴覚障害者の困難を列挙している。

- ・風の音が聞こえない
- ・スイング，ショットの音が聞こえない（ショットの音が8種類あると聞いたが分からない）
- ・林，池に当たった音も聞こえない
- ・同伴者が健常者の場合，コミュニケーションがうまくとれないことがある
- ・ゴルフ場からのお知らせなどのマイクが聞こえないために健常者より気が付くのがかなり遅い
- ・周りの雑音も聞こえない
- ・グリーンの上でパターを打つとき，音でなく手で感覚を頼りにするため，グリーンの速さはどの位あるか掴みにくい

## 5. デフリンピックの歴史と現状

### （1）デフリンピックの歴史（小倉，2018，p.1-2）

デフリンピックの原点は、1924年、折からパリで開催されていたオリンピックをめぐる社会的関心の高まりを活用して、ろう者のためのスポーツ大会を開催しようと、同じ時にパリで開かれた国際静寂大会（Jeux internationaux silencieux、英語では The International Silent Games）にあるとされている（アモンズ，2008）。

この大会は、自らもろう者であり、「ろうあのクーベルタン」とも呼ばれるフランス人 Eugène Rubens-Alcais（ユジェス・リュバン＝アルケ）の主導のもとに行われた。アルケは1884年生まれで、熱病のため幼児期にろう者となった。優秀な成績でフランスの特別支援学校（視覚、聴覚障がい者専門学校）を卒業後、自動車修理工として働きながら、20歳の時『Le Sportsman Silencieux（無声スポーツマン）』という名前の雑誌を創刊、続いて1918年、la Fédération Sportive des Sourds de France（略称 FSSF、フランスろう者スポーツ連合）を創設した（Cabanel & Encrevé, 2015, p.34）。この背景には、もともと、健聴者とろう者が一緒になり、レスリング、ボクシング、体操競技などが行われていたことと、1890年代以降フランスを中心とする自転車競技においてろう者の参加が始まったことなどが影響していたと考えられる。

現に、1891年、5人の若いうろう者が自転車の100キロメートル競技に参加し、その中

の一人は、シャンパンの銘柄の一つとして著名なメルスイエ（Mercier）家出身の青年アンリ・メルスイエ（Henri Mercier）で、彼は健聴者も含む60人の参加者のうちトップの成績を取めたという（Séguillon, 2002, p.121, 132）。

FSSFの目的は、（イ）フランスにおけるろう者のスポーツ活動の振興と統制、（ロ）戸外での体育活動の強化、（ハ）中央では実現できていない、スポーツ団体の統合促進のための基礎作り、（ニ）全てのろう者のスポーツ団体間の関係強化にあったと言われる（Cabanel & Encrevé, 2015, p.34）。

以上の歴史に見るように、デフリンピックの場合、競技大会を開催する以前からろう者のスポーツ団体が活動しており、そうした活動に一層の弾みをつけるために国際大会が開催されたのであって、パラリンピックのように競技大会の開催がまずあり、障がい者スポーツ組織の整備は、大会開催と運営を円滑にするために、むしろ大会の後に促進されたものとは、歴史的事情を若干異にしていることに注目する必要がある。

また、デフリンピックの発展の背景には、フランスにおける手話に関する規則の問題がからんでいたことに注意する必要がある。

もともと、フランスでは、1880年以来、ろう者の教育に手話を用いることが実質的に禁止されていた。これは、フランス語を学ぶことをもって、フランス人たる重要な条件にするというフランスの言語政策の影響もあったと考えられる。いいかえれば、ろう者もできるだけ健聴者と同じようになることが求められていたといえる。そうした環境の中で、ろう者は、できるだけ健聴者と同じように活動できることを示そうとして、スポーツ活動を促進するとともに、そこでは、手話を用いてろう者の一体感を醸成するという方向に向かったのであった。

なお、当時フランスにおいても、ろう者に対するスポーツ界での差別待遇があったと言われる。たとえば、1917-18年のシーズンで、フランスのサッカーリーグ協会はろう者のサッカーチームの得点を実際より低くつけ、健聴者のチームを常に上位にのせ、ろう者のチームを最下位にランク付けていたという（Séguillon, 2002, p.122）。こうした「差別」の存在も、逆に、ろう者のスポーツ組織の整備につながったと考えられよう。

1924年5月4日から7月27日まで、折りからパリで五輪大会が開かれたのを契機として、第1回デフリンピックが、同年8月12日から17日まで、国際静寂大会という名前で開催された。大会には、8ヶ国、140人の選手が参加し、5競技（水泳、サッカー、射撃、自転車、陸上）が行われ、また、テニスの模範競技（エキシビション）も行われた（Séguillon, 2002, p.122）。

競技が行われた場所は、次の通りだったとされている（Séguillon, 2002, p.123-4）。ただし、サッカーについては記述がない。

表2 第1回デフリンピック大会競技会場

| 競技名    | 会場                                                   |
|--------|------------------------------------------------------|
| 陸上競技   | ポア・ド・ヴァンサンヌのパーシングスタジアム (Stade Pershing)              |
| 水泳     | トゥレル (Tourelles) の水泳場                                |
| サイクリング | 屋内：ヴァンサンヌのヴェロドローム (Vincenne Velodrome)<br>屋外：パリの東部地区 |
| 射撃     | ヴァンサンヌの射撃場                                           |

大会は五輪大会を踏襲し、選手宣誓や国家斉唱（手話による）等が行われた。

なお、この大会においては、ろう者が、健聴者と同じように行動していることが、ことさら誇示された。たとえば、陸上競技において、スタートは通常の競技のようにピストルの合図で行われ、選手は、ピストルの引き金を見つめて出走したという。また、この大会後、英国および他の参加国の代表は、無名戦士の墓に詣で、第一次大戦での犠牲者を悼んだという (Séguillon, 2002, p.123-4)。

ちなみに、この大会では、一部の競技（たとえば、棒高跳びや400メートル障害）では、数人しか参加選手がおらず、盛り上がりには欠ける競技もあったという (Séguillon, 2002, p.123-4)。

なお、オリンピック大会と異なり（注2）、1924年のろう者の最初の国際競技大会であるパリ大会では、数人の女性ろう者が水泳競技に参加しており、この背景には、女性のろう者は、女性としてのアイデンティティもさることながら、ろう者としてのアイデンティティが強かったため、という見方もある。また、いずれにせよ、ろう者の連帯を強めるという意識が関係者に強かったことが影響していたとみる見方もある。

1924年の大会を契機として、Le Comité International des Sports Silencieux（略称 CISS, 国際サイレント・スポーツ委員会）が創設されたが、この創設には、アルケの他、ろう者としてはベルギーで最初の大学学位取得者であり、また、1924年の大会で、銅メダル（テニス）を得た Antoine Dresse（アントワヌ・ドレス）の協力が大きかったとされている（注3）。

なお、アルケは、単にろう者のスポーツ活動の促進に貢献したのみならず、自分が卒業した特別支援学校の卒業生の団体などを通じて、フランスにおける手話の普及に大きく貢献したと言われている (Cabanel & Encrevé, 2015, p.35)。

The International Silent Games は、1969年のベルグラード大会を機に、The World Games for the Deaf（世界ろう者競技大会）と名前を変え、さらに、2001年のローマ大

会以降は、The Deaflympics（デフリンピック）と呼ばれるようになった。

また、冬季大会は、1949年にオーストリアのゼーフェルドで The International Winter Games for the Deaf（国際ろう者冬季競技大会）として開催されたのが最初であり、1971年のアーデルボーデン（スイス）大会以降 The World Winter Games for the Deaf（世界ろう者冬季競技大会）との呼称が定着し、さらに2003年のスウェーデンのソットバル大会以降冬季デフリンピック競技大会と呼ばれるようになった。

## （２）デフリンピックへの参加資格

デフリンピック大会への参加資格は、聴覚障害者で、両耳のうち良い方の耳の聴力が55dB（デシベル）以上の者に限られる。デシベルとは聴力の尺度である。すなわち、人間の耳の感度は、音の強さ（音圧）と周波数によって異なるが、音圧の範囲は極めて広く、桁数が大きくなるため、便宜上、音圧比の対数を取り、それをデシベルとして、聞こえる（音を認識できる）程度の尺度としたものである（城間・鈴木・小淵，2021，p.31）。デシベルは数値が高いほど、聴力が弱いことを示しており、話し声を聴き分ける程度とマッチングさせると、ほぼ次のようになるとされている（城間・鈴木・小淵，2021，p.9）。

表３ 難聴の程度分類

| 難聴の程度                                                      | WHO       | 聞こえの障害状況         | 推奨                | 日本聴覚医学会 (2014)     | 聞こえの障害状況                                                        |
|------------------------------------------------------------|-----------|------------------|-------------------|--------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 正常聴力 (normal hearing)                                      | 25dB以下    | 囁き声を聞き取れる        | 特になし              | 25dB 未満            | 特になし                                                            |
| 軽度難聴 (slight impairment, mild hearing loss)                | 26dB～40dB | 1 mでの普通の話声を聞き取れる | カウンセリング、補聴器装用の可能性 | 25dB 以上<br>40dB 未満 | 小さな声や騒音下での会話の聞き間違い、聞き取り困難を自覚する。会議などでの聞き取り改善目的では、補聴器の適応となることもある。 |
| 中等度難聴 (moderate impairment /hearing loss)                  | 41dB～60dB | 1 mでの大声を復唱できる    | 補聴器装用             | 40dB 以上<br>70dB 未満 | 普通の大きさの声の会話の聞き間違いや聞き取り困難を自覚する。補聴器のよい適応となる。                      |
| 高度難聴 (severe impairment/ hearing loss)                     | 61dB～80dB | 耳元での叫び声を数語聞き取れる  | 補聴器＋読話指導          | 70dB 以上<br>90dB 未満 | 非常に大きい声か補聴器を用いないと会話がかた聞こえない。しかし、聞こえても聞き取りには限界がある。               |
| 重度難聴 (profound impairment/hearing loss including deafness) | 81dB 以上   | 叫び声でも理解できない      | 補聴器＋読話指導＋手話       | 90dB 以上            | 補聴器でも聞き取れないことが多い。人工内耳の装用が考慮される。                                 |

出展：城間・鈴木・小淵（2021）『聴覚障害学』p.9。WHOと日本聴覚医学会が示す難聴の程度分類をもとに作成

この基準については、デフリンピックは高度な競技大会であることから、競争条件をできるだけフェアなものとするべきであり、まったく聞こえない人々を中心とするべきであるとして、参加基準のデシベル値を引き上げるべしとの意見（たとえば、70dB への引き上げ）もあると言われる。他方、そのようにすると、大会に参加できるろう者の数は減少するであろう。そうすれば、多くのろう者が国際的に交流できる機会も減ることとなり望ましくないという意見もあり、課題として残されている（Stewart, 1991, p.23）。  
(4)

また、デフリンピックにおいては、補聴器の使用は認められていない。これには、補聴器が運動中に壊れるおそれがあるという理由もさることながら、選手の競争条件を画一化するという概念のためとされている。

しかしながら、その根底には、さらに深い考え方が潜んでいる（小倉, 2018, p.7）。すなわち、補聴器は、ろう者を、できるだけ健常者に近づけるための用具でありまた、補聴器によっても十分聴覚機能を改善できない障がい者も存在する以上、補聴器はいわばろう者が「聴者の世界に順応していることを示す象徴的意味合いを持っている」（砂田, 1996, p.153）こととなり、それは結局ろう者の真のアイデンティティを傷つけるものだという概念である。つまるところ、「補聴器が（それを使用する）各人に与える効果はそれぞれ異なり、また予想できないものである以上、競技の上で、その使用を除外することはそれ（除外）がろうであること（deafness）とフェアネスを象徴する行為の一つだからである」とされている（Stewart, 1991, p.25）。

ちなみに、ろうのスポーツ競技者へのアンケート結果によれば、練習時において補聴器を装着している者は25.8%であり、またデフリンピックにおいて補聴器を使用したいという者は全体の24.5%にのぼっている。一方で、補聴器を使用したくないという者（51.7%）にその理由を尋ねると、競争条件の公平性の確保と損傷の危険の回避が、ほぼ同じ程度あげられている（中村, 2009）。

また、デフリンピックにおいては、人工内耳の対外装置は、試合中あるいは競技ゾーンでの使用が禁じられている。他方、体内装置についての規制はないが、格闘技やサッカー、ラグビーなどでは運動中に壊れたりする危険があることなど、医学的見地から注意が呼びかけられている（全日本ろうあ連盟スポーツ委員会, 2017）。

## 6. デフリンピックを巡る組織的問題

デフリンピックは、第5節で記したように、ろう者の国際的スポーツ大会として、国際サイレント・スポーツ大会という名の下に、国際サイレント・スポーツ委員会によって組織、運営され、そののち、1969年以降世界ろう者競技大会の名前にかわり、さらに、2001年以降デフリンピック大会となり、デフリンピック委員会の下に開催されてきた。

しかし、その過程において、障害者の国際スポーツ大会であるパラリンピックとの関係をどうするかが問題となった。

デフリンピックの組織とパラリンピックの組織が、公式に関係を持つようになったきっかけは以下のとおりである（小倉，2018，p.4-5）。

1980年代に、パラリンピック大会（正確には、パラリンピックの前身である国際ストーク・マンデビル大会）の開催を円滑に行うために設けられた International Coordinating Committee Sports for the Disabled in the World (略称 ICC, 障がい者スポーツのための国際調整委員会, IPC = 国際パラリンピック委員会のいわば前身である機関)において、パラリンピックをさらに発展させるために必要であるとの認識から、IOCに類似した IPC を設立すべく、その準備のための特別委員会が設置され、その委員会への CISS の参加問題が発生したことにあると言って良い（及川，1998，p.50）。

言い換えれば、1989年のニュージールランド、クライストチャーチ大会において、デフリンピックの会場に初めてオリンピック旗が掲げられたことに象徴されるように（Bailey, 2008, p.94-95）、1980年代において、パラリンピックとオリンピックの関係についての議論が高まり、その過程で、いわばもう一つの障がい者スポーツ国際総合競技大会であるデフリンピックとの関係をどうするかが問題となったのである。

具体的には、デフリンピック関係者として、CISS の委員長 Jerald M. Jordan（ジェラルド・M・ジョーダン）が ICC に参加する形で、デフリンピックとパラリンピックの関係調整が行われることとなった。

しかしながら、CISS の ICC 正式参加には、いくつかの問題あるいは障害があった。一つには、CISS の独自の歴史的ステータスである。ICC としては、IOC とできる限り対等に渡り合うためにも、ICC がろう者も含めた障がい者スポーツ競技全体の調整役である形を取りたかったのに対して、CISS 側は、自己の存在意義をできるだけ高めるためにも、独自に IOC と協議することに固執したのであった（Bailey, 2008, p.71）。また、財政上の問題もあった。例えば、ICC 関連会議における手話通訳にかかる費用を、CISS 側ではなく ICC 側が負担すべきとする CISS 側の考え方に、ICC 側としては賛同

できなかった。

この手話通訳の費用負担の問題は、単なる通訳費用の分担という財政的問題に止まっているのではないことに注意を要する。すなわち、ろう者側から見れば、そもそも手話通訳が必要なのはろう者ではなく、健聴者であるという考え方が根底にある（及川，1998，p.52）。言い換えれば、手話通訳を提供するのは障がい者のために行う福祉事業ではなく、社会全体が当然用意すべき義務なのだという考え方である。この考え方によれば、通訳費用を負担すべき者は、当然 CISS 側ではなく、ICC あるいは IPC 側となるのである。

その他、デフリンピックの開催年次とパラリンピックの開催年次には、ずれがあり、これを調整しなければならないという問題もあったと考えられ、また、そもそも聴覚障がい者はオリンピック大会に出場可能であり、現に前述のように、何人かの聴覚障がい者は五輪においてメダリストになっていたという背景も、聴覚障がい者は他の身体障がい者とは別であるとの議論を生む理由の一つとなっていたとみられる。

こうした事情あるいは背景によって、結局、CISS 関係者と ICC 及び IPC 関係者との間の意見の隔たりは埋まることなく、1990年に両者の間で、デフリンピックはパラリンピックとは独自に大会を行うこと、各国のろう者スポーツ団体の自主性を尊重することなどを織り込んだ協定が取り交わされたのであった（及川，1998，p.51）。このように、両者が合意に至らなかった背後には、いくつかの事情ないし要因が絡んでいたとみられる。ICC の中で、新しいメンバーたる CISS 関係者や知的障がい者競技連盟関係者は、パラリンピック関係事項について投票権を持つべきではないと言う議論が強かったことも一因として挙げられる（Bailey, 2008, p.75-76）。また、ICC の委員長には CISS 関係者は任命されないという問題もあった（Bailey, 2008, p.82）。つまるところ、CISS 側から見ると、ICC のメンバーになれば、会議出席のための旅費や手話通訳の費用など、財政的負担が増える一方、メンバーになったことから生ずるメリットは取り立ててないという結論になったとみられる。その後、デフリンピックとパラリンピックとの協力関係は冷却化し、1989年に IPC が正式に発足した6年後、1995年に、CISS は正式に IPC のメンバーシップから離脱したのであった。

## 7. デフリンピック関連競技団体の実態

我が国におけるデフリンピック関連競技団体として、ろうあ連盟スポーツ委員会のウェブサイトに掲載されている団体は、24団体にのぼる。（表4参照）

表4 デフリンピック関連競技団体

|                               |
|-------------------------------|
| 一般社団法人日本デフ陸上競技協会              |
| 一般社団法人日本デフバドミントン協会            |
| 特定非営利活動法人日本デフバスケットボール協会       |
| 一般社団法人日本デフビーチバレーボール協会         |
| 一般社団法人日本デフボウリング協会             |
| 一般社団法人日本ろう自転車競技協会             |
| 一般社団法人日本ろう者サッカー協会             |
| 特定非営利活動法人日本デフゴルフ協会            |
| 一般社団法人日本ろう空手道協会               |
| 日本デフオリエンテーリング協会               |
| 一般社団法人日本ろう者スキー協会              |
| ジャパン・デフ・アーチェリークラブ             |
| 一般社団法人日本ろう野球協会                |
| 日本ろう者ソフトボール協会                 |
| 一般社団法人日本デフ水泳協会                |
| 一般社団法人日本ろうあ者卓球協会              |
| 一般社団法人日本ろう者テニス協会              |
| 一般社団法人日本デフバレーボール協会            |
| 特定非営利活動法人全日本聴覚障害スキー指導員会       |
| 一般社団法人日本デフサーフィン連盟             |
| 特定非営利活動法人日本聴覚障がい者ラグビーフットボール連盟 |
| 一般社団法人日本ろう者柔道協会               |
| 一般社団法人日本デフセーリング協会             |
| 日本ろう者ライフル射撃協会                 |
| 公益財団法人日本ハンドボール協会デフハンドボール専門委員会 |

ろうあ連盟スポーツ委員会 HP, <https://www.jfd.or.jp/sc/sportsassoc> (2025年4月22日閲覧)

## (1) 名称

これらの団体の名称については、「ろう」「ろう者」「ろうあ者」といった表現を用いているものが約半数、「デフ」という表現を用いているものが約半数をしめている。

なお、デフリンピック大会競技種目の団体ではないが、ろう者の日本ラグビーフット

ボール連盟は、「日本聴覚障がい者ラグビーフットボール連盟」という名称を使っている。

## （２）法的な資格

表４の団体の法的資格は、社団法人がほとんどで、特定非営利活動法人は、二団体にとどまっている。ただし、デフリンピックの競技で、日本に関連競技団体が存在しないものもいくつか存在する（たとえば、オリエンテーリング、テコンドー、レスリングなど）。

## （３）事業内容

事業内容は、いずれも、競技の普及、振興を一つの柱とし、同時に、競技能力の向上も柱とするものが殆どである。

## （４）財政状況

競技団体の財政状況については、収入のうち９割以上を助成金が占める団体が４団体、助成金の割合が収入の半分以下である者が３団体で、助成金依存率の平均はおよそ７４％前後に上っている。

## （５）役員構成

団体のトップの責任者がろう者である団体がデフリンピック関連団体の大半を占めているが、健聴者が代表である団体もいくつかみられる（なお、HPなどの情報がインターネット上では数団体存在する）。

## （６）健常者国体との結合、連帯

一部のろう者競技団体は、財政的、人的理由などから、健常者団体の傘の下に、いわば、その一部分として組織されているものもある。たとえば、デフハンドボール競技団体は、ハンドボール協会の中にデフハンドボール委員会という形で存在している。

# ８．デフリンピックにおけるコミュニケーションの問題

デフリンピックではろう者同士、あるいはろう者と健聴者との間のコミュニケーションのとりかたに問題が生じやすい（小倉，2023，p.52-55）。監督、コーチ、選手同士のコミュニケーションの問題は、競技成績にも影響を与えやすい。とりわけチーム競技で

はこの点が重要であり、たとえば、台北大会のバスケット競技について、この点の指摘があった。また、この問題はチーム競技のみならず、(バドミントン競技シングルスを含む)個人競技においてもみられた(日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟, 2010, p.65-66)。こうした、コミュニケーションの問題は、選手間や選手と監督との間だけではなく、審判、医師などとの間、あるいは大会組織委員会による説明においても生ずることがある(日本障害者スポーツ協会・財団法人全日本ろうあ連盟, 2010, p.31,55)。また、PR活動の一環として競技場外のマスコミ関係者などとの接触の際には、手話通訳、音声通訳などが三重四重に介在することがあり(全日本ろうあ連盟, 2018, p.45)、そうした状況への対処をあらかじめ考えておく必要がある。

なお、審判や選手同士のコミュニケーションの問題がいかに試合結果に影響するかの点について、ソフィア大会のバスケットボール女子チームのヘッドコーチによる以下のような指摘は、傾聴に値しよう。

審判のコールについて、デフバスケットボールは敵味方の声など、音声による情報が遮断されるため、背後など死角での接触がどうしても多くなります。死角での接触に対するコールが多くなったことで、審判自身の心理面において、疑わしい場面では笛を吹きやすい雰囲気が全体にありました。そして近代バスケットボールはパワープレーが重要視されてきており、オフェンスに有利なルールとなっているため、ディフェンス側は対応策としてファウル数を計算しながらあえてファウルをする状況も生まれています。審判はゲームをコントロールするため、被ファウル側が不利になるコールはしないなどの対応をしており、今回は言語の壁(健聴者、ろう者:手話、音声英語、音声ブルガリア語など)によってその対応にばらつきが生じてしまっていたと推測されます。さらに接触転倒については、日本国内ならばチャージングを取る場面でも、デフリンピック期間中においては、転倒の原因となった動作がオフェンス側にあるのかディフェンス側にあるのかが体格差によって隠されてしまい、故意による接触なのか、そうでないのが判断しづかったため、総じて日本は審判のコールに対して不利でした。我々は、今までの国際大会の経験から「審判のコールに必要以上に神経質にならない」よう、選手に周知し、納得のいかないコールに対しても冷静にアジャストするよう求めてきましたが、今後も国際大会においては、被ファウルについても含め、国際試合における審判へのアジャストも強化のテーマとして重要になってくると考えられます(一般財団法人全日本ろうあ連盟, 2014, p.62)。

ちなみに、我が国において、監督、コーチなどのデフリンピック関連指導スタッフに占めるろう者の割合は約2割と言われる（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター，2009，p.27）。

デフリンピックにおけるコミュニケーションの問題は、手話通訳者に関連するものも多い。手話通訳者の数の不足の他（日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟，2010，p.39），しばしば指摘される点として、業務分担の問題がある。すなわち、手話通訳者が通訳業務以外に食料の調達、英訳業務の手伝い、連絡事務などを引き受けることの可否とその程度態様の問題である（日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟，2010，p.82,122；一般財団法人全日本ろうあ連盟，2014，p.108；全日本ろうあ連盟，2018，p.93）。この問題は、手話通訳者が通訳以外の仕事をするのはあくまでボランティア活動であるとみなすか、あるいは、そもそも手話通訳者は、通訳であると同時に大会業務のため派遣されたスタッフの一員であると認識すべきかという問題でもあるといえる（全日本ろうあ連盟，2018，p.115）。この点に関連して、ある手話通訳者は次のような指摘を行っている（全日本ろうあ連盟，2018，p.23-95）。

職務は手話通訳ですが、（以下の業務に従事したことに見られるように）チームスタッフとしての役割比重が大きかったように感じます。

○手話通訳としてのコミュニケーション確保

- ・チーム内（練習，試合，ミーティング）
- ・その他（他競技選手スタッフ，旅行会社，於成田空港）
- ・報道関係インタビュー

○チームスタッフとして

- ・メデイカルスタッフとの連携
- ・本部との連携
- ・補食の調達
- ・練習時の球拾い
- ・TD 会議出席

この問題は、また、手話通訳者にどこまでの専門性を要求するかの点とも関連している。ある通訳者は、次のように、人材育成の必要性を強調しているが、そうした方向をとるためには、通訳業務と他の業務とのきっちりとした仕分けがなされねばならないで

あろう。

やはり専門性を持った通訳者の育成が課題だと思います。デフスポーツにおける通訳者には、手話通訳の技術の他にも、競技に関する知識、長期の帯同に耐えうる体力、選手のメンタルに寄り添える人間力など幅広い力が求められます。今回はチームに国際手話ができる選手がいたので助けられましたが、競技に集中してもらうためには、やはり英語や国際手話が堪能なスタッフも必要です（全日本ろうあ連盟, 2018, p.67）。

この点とも関連して、各競技団体が派遣する通訳と、本部が派遣する通訳との業務分担が必ずしも明確ではないとの指摘にも留意すべきである（全日本ろうあ連盟, 2018, p.83）。

他方、通訳者の仕事が円滑に行われるよう、器具の整備も必要であろう。すなわち、手話通訳者がハンズフリーになるように携帯電話用のイヤホンを提供することや（全日本ろうあ連盟, 2014, p.117）、本部や外部との連絡には、人によっては音声変換ソフトを活用すること等が考えられる。

なお、手話通訳者については、試合中の通訳者の居場所についてのルールが統一されていないことによる不便を指摘する声も挙がっている（全日本ろうあ連盟, 2014, p.117, 123）。

手話通訳の問題にかぎらず、デフリンピックにおいては、開催地の母国語、英語、日本語、開催地の手話、国際手話、日本手話の間の通訳といった複雑な状況を呈することが当然予想されるが、実際の例として、次のようなケースが報告されている。

男子200mで山田真樹選手が、金メダルを獲得した際、トルコのテレビ局の方が山田真樹選手のお父様にインタビューをしたいという申し出がありました。その際、トルコ語（トルコテレビの方）→国際手話（トルコ人スタッフ）→日本手話（陸上の国際手話通訳の宮本氏）→音声通訳（三坂）→山田父。日本語（山田父）→日本手話（三坂）→国際手話（陸上の国際手話通訳の宮本氏）→トルコ語（トルコ人スタッフ）→トルコテレビ、という流れで、通訳をさせていただきました。この経験は大変貴重なものでした。それと同時に簡単な挨拶だけではなく、今後は国際手話も覚えていきたいと思うようになりました。

大きなトラブルはなかったものの、選手にとって大会に集中でき、不快感のない良い環境作りができたのか、もっとできた事があったのではないかと反省が残ります。

す（全日本ろうあ連盟，2018，p.45）。

なお、サムスン大会において、手話通訳に関連して次のような特別の配慮がなされたことが報告されている。すなわち、「日本選手団が利用したトルコ航空には、手話言語ができる客室乗務員が搭乗し、手話による機内ビデオも用意されていた」こと、そして、大会出場には「テレビ電話システムを用いて国際手話通訳と24時間いつでもやりとりができる仕組み」が設けられていたことである（東京都オリンピック・パラリンピック準備局，2020，p.40）。

## 9. デフリンピックにおける財政的問題

デフリンピック大会への準備及び実際の参加をめぐる、その費用に関する個人負担の問題については多くの選手、関係者によって指摘されている（小倉，2023，p.57-60）。デフリンピック報告書では、一般的な問題提起のほか、具体的な個人負担の費用項目への言及もある。たとえば、合宿費の負担、渡航費、国際大会への参加費などが挙げられている（日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟，2010；全日本ろうあ連盟，2014；全日本ろうあ連盟，2018）。選手候補も含め、デフスポーツ選手151名へのアンケート調査（2009年）によれば合宿費や遠征費用については8割が自己負担となっており、年間の自己負担費用が50万円を超える者は、回答した者のうちの約4割に上っていると言われる（筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター，2009，p.25-26）。

この問題は、選手の参加辞退にも波及する深刻な問題であるとの指摘（たとえば、陸上競技の選手から「メダル獲得射程内でも、経済的状況により辞退する選手も何人かいた」との指摘）もある（一全日本ろうあ連盟，2014，p.49）。また、ビーチバレーの監督は、「出場できたとしても全額自己負担というのは決定事項であり、費用の工面や会社への休暇申請など非常に行動しにくい状況が長く続きました」と記している（全日本ろうあ連盟，2014，p.69）。

個人負担の問題の影響は選手のみならず、コーチなどにも及んでおり、陸上競技のコーチは次のような苦境を述べている。

8年ぶりのコーチでしたが、ギリギリまで投てきコーチがいなかった点に疑問を感じました。三枝監督とは年賀状やメールなどで進絡はとりあっていたものの、大会が迫った中で私に依頼があったことを考えると、コーチがなぜ決まらなかったのかと感じました。投てきがある程度でき、手話もできる人物が本当にいないのだろ

うか。そういう人物は存在するとは思うが何故決まらなかったのか、それは『お金』の問題であるかと思います。大会前に返ってくるともわからない30万円近くの大金をなぜコーチが支払う必要があるのでしょうか。この状態は普通ではありません。このことがコーチ就任を足踏みさせる原因なのだと思います。大会前の合同合宿の往復の旅費においても、連盟などが事前に資金を準備したり、合宿中に返金するなどの措置が必要です。選手にしても同じ事が言えると思います。日本代表レベルの選手達がなぜ50万円近くのお金を払って出場しなければならないのか甚だ疑問です。資金面を連盟や国がしっかりと管理し、免除する方向に持って行かない限り、今後は選手ほか（ママ）コーチを快く引き受ける者はいなくなると考えられます（全日本ろうあ連盟，2018，p.42）。

こうした状況の解決策としては、競技関係団体の努力、スポンサーの獲得などへの言及もみられるが、特定の解決策として、派遣費用の自己負担のありかたにつき「メダルが獲得可能なレベルの者は自己負担なし，8位入賞以上のレベルの者は半額自己負担，入賞が厳しいレベルの者は全額自己負担，といったかたちでの制度を整えるべき」との意見も出ている（全日本ろうあ連盟，2018，p.48）。

他方，資金獲得への様々な努力や取り組みは，単に金銭的な自己負担の軽減の為のみならず，その過程を通じて，競技の知名度の向上や選手の意識の向上に役立つとの趣旨の以下の指摘は傾聴すべきであろう。

特に頭を悩ませたのは，資金面での対応です。数少ない資金＋世界選手権の派遣費用やデフリンピックの派遣費用の準備について，日々の合宿計画をしながら，「選手達の負担が少なくなる方法を模索すること」が今思えば，私にとっての大きな課題だったのではないかと今となって思います。また学校や企業への訪問，ポスター・チラシ制作（デザイナー依頼，発注，発送…）など，様々な業務に取り組み，私自身が選手時代にすごく疑問に感じていた広報分野にも取り組み，一定の成果を得た手応えを感じています。実際に，一般の方々の目に触れるところに貼らせていただいたり，寄付金をいただいたり，見学や興味を持ってもらえることが増えました。その結果，選手たちが日本代表という誇り，プライド，憧れの対象となることができたのではと思います（全日本ろうあ連盟，2018，p.106）。

他方，選手やスタッフで自己負担はじめ金銭的問題を云々しすぎる者は，むしろ放置し，チームから自然と脱落させることによって，チーム全体の士気を高めることに活用

したとする次のコメントは、(資金面の困難の程度、態様にもよるが)困難の克服の過程に意味があるという障害者スポーツ特有の価値観と関連しているとみることもできよう。

特にスタッフに関しては「フォアザチーム」「フォアザ選手」で献身的な活動を深く要求しました。前述したように資金面の厳しさや諸事情から、満足に謝礼も払えず、ほとんど善意にゆだねるような状況が続いたことから、名誉欲や金銭的な要求の高い人、規律や指揮系統に関する理解力、協調性のない人間とは結局、袂を分かち結果となりました。これはシビアで厳しい合宿を行ったことによる成果であり、副産物であり、残ったスタッフや新たに登用した臨時も含めたスタッフにもいい意味での緊張感や、チームに欠けているところを埋めていこうとする積極性と一体感が生まれていきました。予算の少なさから、満足にウェアを支給もできず、いわゆる日本代表なら当然与えられるものという意識とはかけ離れた強化体制で臨まざるを得なかったことを逆手にとり、結束を図っていくことができました。残ったスタッフたちや苦勞した選手たちには感謝の言葉以外ありません。最大限の賛辞を贈りたいと思います(全日本ろうあ連盟, p.102)。

金銭的あるいは財政的問題の一環として、スポンサーの獲得の問題がある。この問題については、一般論としての重要性を指摘したもの(日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟, 2010, p.120)、より具体的な改善ポイントに言及した意見もある。たとえばある陸上競技選手は、「日本選手団名簿には都道府県の協会しか記載されていませんが、職場の同僚の支援のおかげで出場している以上、恩返しという意味で会社名や学校名も記載してほしいです」という意見を述べているが(全日本ろうあ連盟, 2014, p.45)、こうした点はスポンサーとの関係でも配慮できる点であろう。

また、報奨金の問題も存在する。諸外国と比べて日本では報奨金がほとんど出ないことへの失望の声もある(日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟, 2010, p.31)。そして、報奨金の有無は、単に金銭的負担軽減の問題を超えて、選手のやる気の問題という精神的影響ともつながっているとの指摘もある(全日本ろうあ連盟, 2014, p.26)。さらには、報奨金の有無の問題を、練習時間の確保などについての配慮の問題と同じ次元でとらえる者もいる(全日本ろうあ連盟, 2014, p.31)。

他方、この問題は、全体的な「成功の報酬」と関連しているとして、デフリンピックの知名度、世間の注目の度合いを高めるといった課題も含めた広い次元で考えるべきとの見方もあることに留意すべきであろう(日本障害者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟,

p.28)。

## 10. デフリンピックの選手像－報道分析

2025年に東京においてデフリンピック大会が行われることにも鑑み、近年開催されたデフリンピック大会（2017年トルコのサムソン，2021年ブラジルのカシアスドスル両大会）に出場した日本選手についての新聞報道（朝日，毎日，読売の地方版も含めた関連記事および写真）を網羅的に分析し，そこから浮かび上がる選手像（選手についての報道の動向）を次の項目別に取りまとめた（小倉，2024）。すなわち，障害の原因，日常生活上の困難，練習環境などの困難，健常者の選手との関係，競技におけるプレイのやり方やテクニック，知名度およびそれに関連する事柄，自己意識ないしアイデンティティ，報道関係者とのコミュニケーションの態様などである。

### （1）障害の原因と態様

パラスポーツの選手報道においては，通常，障害の原因，程度，ならびにいつから障害を持つにいたったかという3点が問われる。

デフリンピック選手報道についても，よくみると，この3点が意識されている場合が多い。しかし，ケースによっては，いつから障害があったかについては明確でない報道もあり，また，全く聞こえないのか，難聴ではあるが補聴器をつけて補完しうる状態なのかなどについて明確ではない報道も少なくない。さらに，稀ではあるが，特定の選手のかかなり長い紹介記事でも，障害の態様について全く言及のないものもある。たとえば，バレーボールの宇賀耶早紀選手のことを報じた，2017年12月9日付『読売新聞』朝刊記事は，記事の表題で「聴覚障害者バレーボール女子」と題してはいるが，記事そのものの中では，同人の障害について一切触れていない。

以下，典型的ケースとも言える記事についてのその報道態様をみると次の通りである。

表5 デフリンピック選手と障害の態様

| 競技     | 氏名    | 態様                                                                                                |
|--------|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 水泳     | 茨 隆太郎 | 先天性感音性難聴 <sup>1</sup> 。しかし，同じ新聞（読売）の，同じ選手の紹介記事では，単に「生まれたときから難聴」といった表現で紹介されている記事もある <sup>2</sup> 。 |
| バレーボール | 尾塚 愛実 | 生後7ヶ月の検査で，感音性難聴との診断 <sup>3</sup>                                                                  |

| 競技     | 氏名     | 態様                                                                                            |
|--------|--------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| バドミントン | 柿内 康平  | 幼い頃からほとんど聞こえない <sup>4</sup> 。                                                                 |
| 水泳     | 金持 義和  | 幼い頃の病気が原因で小学一年生から耳が聞こえなくなった <sup>5</sup> ，なお病名を髄膜炎と明記した記事もある <sup>6</sup> 。                   |
| 水泳     | 齋藤 京香  | 3才のとき両耳が先天性の中程度の難聴と分かる <sup>7</sup> 。                                                         |
| 陸上     | 佐々木 琢磨 | 幼い頃，内耳性難聴になる <sup>8</sup> 。なお，「1才のとき」と時期を明示した記事もある <sup>9</sup> 。                             |
| 陸上     | 設楽 明寿  | 生まれつき耳が聞こえない <sup>10</sup> 。                                                                  |
| 水泳     | 津田 悠太  | 大声が聞き取れない重度難聴 <sup>11</sup> ，原因や障害発生の時期については言及なし。                                             |
| バドミントン | 長原 菜奈美 | 生まれつき聴覚に障害 <sup>12</sup> 。                                                                    |
| 自転車    | 早瀬 久美  | 生まれつき聞こえない <sup>13</sup> 。                                                                    |
| 水泳     | 藤原 慧   | 幼いころ風疹などで高熱を出しその後遺症で耳が不自由になる <sup>14</sup> 。1才の時と時期は明示してあるが，病名については言及のない記事もある <sup>15</sup> 。 |
| 卓球     | 山田 萌心  | 生まれつき難聴 <sup>16</sup> 。                                                                       |
| 陸上     | 湯上 剛輝  | 先天性聴覚障害 <sup>17</sup> 。                                                                       |

これらのケースにあるように，デフリンピック大会に出場するような選手たちは，ほとんど，先天性かあるいは幼児時代の病が原因で聴覚障害者となっており，成人あるいは少年少女時代になってから障害を受けたのではない。言い換えれば，健聴者としての体験がほとんどないと言える。したがって，自己のアイデンティティの一つとして，「聴覚障害者である」という点は，極めて自然であり，強いといえよう。また，先天性あるいは幼い時期の病が障害の原因である場合がほとんどであることは，障害の原因に，戦争，産業災害，自然災害，交通事故といった，社会性を帯びた事情がからんでいないことを意味しており，この点，パラリンピックに出場する選手と境遇の違いがみてとれる。

他方，多くの聴覚障害の選手は，普段の生活では補聴器を使用しているケースも少なくなく，補聴器を外すことが要求されるデフリンピック競技は，ある意味では，特別のルールを決めた新しいスポーツであるともいえる。このことは，後述するように，デフリンピック出場選手の中でも，かなりの選手は，健常者の競技大会への出場を目指していることとも関連しているといえよう。

## (2) 日常生活上の困難

デフリンピック選手についての報道には、時として、聴覚障害者として、日常生活上、どういう困難を体験しているかについて言及しているものがある。とりわけ、健常者とのコミュニケーションの困難について触れたものも散見される。たとえば、陸上の山田真樹選手は、大学時代、当初は「補聴器をつけても多人数だと話が聞きとれなかった。周りが笑うと、その理由がわからず、自分もぎごちない笑顔を作った。パントマイムで習った全身表現や手話で思いを伝えるようにした」と述べている（『朝日新聞』2017年7月30日朝刊）。同じような体験は、水泳の茨隆太郎選手によっても言及されており、相手の口の動きを読む「口話」も多人数になると通用せず、「わかったふりをして数々のトラブルを起こした」という（『朝日新聞』2017年7月27日夕刊）。

また、健常者と一緒に練習や競技を行うと、「スタートのピストルの音が聞こえないため、他の選手の反応を感じてカバーするなどの苦労がある」という者もいる（『読売新聞』2017年7月13日夕刊）。

加えて、元来、耳は聴覚だけでなく平衡感覚を司るため、陸上の佐々木琢磨選手は、コーチに「走る際に体のバランスがとれていない」と指摘されたという（『朝日新聞』2019年2月15日宮城朝刊）。同様に、ハードルの高田裕士選手は、コーチから「ハードルを飛ぶまでの走るリズムが大事」と指摘されたが、これも聴覚に障害のある選手の多くは、リズム感を習得するのが苦手なせいであるといわれる（『朝日新聞』2017年7月16日朝刊）。このため、五輪に出場しようとしても、聴覚障害者は、音の問題に加えて、「平衡感覚を司る三半規管にも障害のある選手が多い」ことからくる困難があると言われる（『毎日新聞』2020年11月24日夕刊）。

そもそも、聴覚障害を理由に、学校で運動部に入れてもらえなかったケースや（注5）、職業資格が聴覚障害者には閉ざされていたケース（その後開放された）もある（注6）。こうした事情もあって、選手生活と就業の両立は、聴覚障害者にとって困難を伴うことも稀ではなく、水泳の藤原慧選手も、こうした苦悩を述べている（『読売新聞』2022年5月4日）。

他方、デフリンピック大会に出場する選手たちは、大会では日常生活とはまた違った次元の世界で競技しなければならないので、その落差に戸惑う点にも注意を払う必要があるだろう。

たとえば、水泳の齋藤京香選手は、普段は補聴器をつけて生活しているだけに、初めは、「補聴器を外さねばならない水中は怖かった」と述懐している（『読売新聞』2018年3月15日山形朝刊）。また、女子バレーボールの平岡早百合選手は、普段の練習では補

聴器をつけて行っているが、デフリンピック大会では、初めは「音のない状態が怖くて、聞こえないのに聞き取ろうと集中しすぎて頭が痛くなった」と述べており（『朝日新聞』2017年7月29日朝刊、『朝日新聞』2017年8月8日埼玉朝刊）、一部の難聴者で補聴器を常用している選手にとって、デフリンピックは、日常と違う世界として特別の心理的負担を与えるものであることが示唆されている。

他方、日常生活上では、とにかく「聞こえないこと」は、障害でありハンディキャップと考えられがちであるが、デフリンピックでは、そうともいえないという思いを抱いた選手もいる。たとえば、陸上のリレー競技で金メダルを獲得したチームの一員である佐々木琢磨選手は、練習では、耳が聞こえないだけに、バトンパスの合図を声や足音を頼りに行えないため、歩測と影をたよりに練習したが、健常者の五輪大会でも、音による合図は声援にかき消されて聞こえなかったと知り、「僕たちにもできると思った」と述べている（『朝日新聞』2017年7月31日朝刊）。このことは、「聞こえないこと」が常にハンディキャップとなるわけではないことをあらためて認識せしめたという点で、デフリンピック大会の環境と日常生活との間に違いがあることを示しているともいえよう。また、デフサッカーの東海林直広選手は、デフリンピックでは、普段から身振り手振りでのコミュニケーションに慣れている聴覚障害者は、「言葉が分からない外国人にも、自分たちだからこそ伝えられることがある」という思いを強くしたという（『朝日新聞』2018年12月15日夕刊）。ここでも、日常生活上のハンディキャップが、デフリンピックでは逆にある種の利点に近いものとなっていることが暗示されている。

### （3）健聴者との練習、試合をめぐる問題

聴覚障害者のスポーツ活動、とりわけ、選手のスポーツ活動においては、時として、健聴者に混じっての練習や試合が、大きな意味をもつ場合があるが、そこでは、同時に、若干の困難が指摘されている。たとえば、水泳の藤原慧選手は、高校時代に全国大会において1500メートル自由形競泳で5位に入る活躍を示しているが、「スタートもピストルの音が聞こえないため、他の選手の反応を感じてカバーするなどの苦労がある」という（『読売新聞』2017年7月13日夕刊）（注7）。

また、ハンマー投げなどでは、重心を常にハンマーより前に置くことで遠心力を働かせるが、健聴者は、刻々と変化するハンマーの位置を耳も含め五感に頼って確認するが、聴覚障害者はとにかく視覚に頼りすぎ、ずれが生じやすいという困難があるともいわれる（『毎日新聞』2012年7月5日大阪朝刊）。

なお、自転車の早瀬久美選手は、パラリンピックの自転車競技にボランティアとして参加するなどの体験を通じ、聴覚障害者特有の困難として、次のような点を指摘してい

る。すなわち「自転車競技ではギアチェンジやペダルを踏み込む際の音、背後から迫る選手の息づかいなどを、健常者のトップ選手たちは駆け引きの判断材料としているので、聴覚障害者の不利も大きい」という（『読売新聞』2021年9月5日朝刊）。

こうした「困難」を克服して健聴者と同じ土俵で、練習し試合することは、実は、精神的に障害を克服するという象徴的意味があるともいえる。このことを、藤原慧選手は、次のような言葉で表現している。すなわち「障害を持ってもやれる、ということを証明するために健聴者の中でやってきた」と（『読売新聞』2017年7月13日夕刊、『読売新聞』2017年7月22日朝刊、『毎日新聞』2017年12月8日大阪朝刊）。また、そうした「克服」の過程を、次のような趣旨の体験談として語っているハンマー投げ選手もいる。すなわち「甲子園を目指して健常者が通う学校を受験したが失敗し、失意の中でろうあ学校へ進学、そこでハンマー投げをすすめられ、五輪選手の室伏氏から手話をまじえて指導をうけて意欲を増した」と（『毎日新聞』2013年3月25日滋賀）。

他方、こうした「克服」のシンボルとしての意義を、選手たちがデフリンピック大会出場から常に関心を感じ取るとは限らない。むしろ、同じ聴覚障害者としてのアイデンティティを強め、障害を克服することもさることながら、障害を素直に受け止め、それを自らの特性と考える機会がデフリンピックにあるという見方もある。たとえば、前述の藤原慧選手は、デフリンピックへの参加の印象を次のように語っている。すなわち「ボクはこれまで聞こえなくとも健聴者と一緒にやれることを証明したくてやってきたが、この世界（聾啞者だけの大会）もいいものだなと思った」（『読売新聞』2017年7月26日朝刊）。ここには聴覚障害者自身のアイデンティティにまつわる微妙な問題が暗示されているともいえよう。

#### （４）競技場での特有の困難とその克服

障害者スポーツのみならず、多くのスポーツ報道においては、勝利の原因や、選手の作戦などについての論評が多い。聴覚障害者の競技活動、とりわけデフリンピックの如く高度の競技性を有する大会においては、各種の競技活動の上で、聴覚障害がどのような困難を惹起し、それに競技者がどのように対処しているか（ピストルに代わるスタート方法や、笛に代わる旗の使用といった審判や競技ルールに関連するコミュニケーションの問題を越えて、競技そのものの能力、技能の発揮のための工夫如何）については、十分な説明や報道が行われているとは言い難い。

競技場での特有の困難とその克服に関する数少ない報道の中には次のような例がある。

女子バレーボールについて、聴覚障害があるだけに、構えと視線が一層重視されると

の指摘がある（『読売新聞』2017年3月31日神奈川朝刊）。

また、陸上競技のリレーにおいて、前の走者の影を見ながらバトンパスの仕方を工夫した、あるいは、前の走者がどこまで来たら次が走り出すか、チームでは、各走者が走り出す地点から逆方向にシューズ一足分ずつ距離を測る「歩測」で決めるといった工夫がされているという論評もある（『朝日新聞』2017年7月31日朝刊）。

また、ハンマー投げの森本選手は、前述のように、五輪選手の室伏氏のやり方を学ぶため、室伏選手の映像を作成してもらい、スピーカーに手を触れて振動によってリズム感覚をつかむ練習をしたという（『毎日新聞』2012年7月5日大阪朝刊）。

いずれにしても、こうした聴覚障害者特有のプレイの工夫や練習方法についての解説は、いまだ十分とは言い難く、聴覚障害者のスポーツ大会の「魅力」の発信には、こうした点の考慮もさらに必要と思われる。

## （５）知名度の問題

選手、関係者を問わず、デフリンピックについて、ほぼ例外なく言われる論議あるいは訴えは、知名度が低いという点である。

こうした知名度の低さにどう対処すべきかについては、選手自身によって各自の意見が述べられている。

なんといっても、情報発信が大事であるというもっともな意見もある（注８）。さらにそうした「情報発信」の具体策として、陸上の佐々木琢磨選手は、デフスポーツを広めてゆくことが自分の使命であるとして、講演や陸上教室などに従事している（『読売新聞』2023年8月2日夕刊、『読売新聞』2022年8月18日岩手朝刊）。

しかし、選手によっては、何よりも成果を出し、立派な記録を残し、できればメダルを獲得することが、知名度をあげる最大の要因だと見る者もいる（『読売新聞』2022年8月13日岩手朝刊、『読売新聞』2016年6月11日朝刊、『朝日新聞』2018年1月24日兵庫朝刊、『朝日新聞』2021年11月12日青森朝刊）。また、競技の魅力を伝える努力が必要という見方を強調する関係者もいる（『朝日新聞』2019年2月18日神奈川朝刊）。

知名度向上との関連では、通常、より知名度の高い健常者と混じって試合に出場することが、聴覚障害のある選手の知名度向上にも役立つと見る選手も存在する（『読売新聞』2022年5月4日朝刊）。

加えて県や市町村レベルでの褒賞が、選手の知名度、ひいてはデフリンピックの知名度を高めるために役立つことは言うまでもなく、また、聴覚障害者関連団体が主催する講演、選手によるトークショー、グッズ販売などを組み合わせたイベントが、知名度向上に役立つといえよう（注９）。

他方、デフリンピックについての知名度向上が叫ばれる一つの背景として、近年パラリンピックの認知度が上がっているのに対して、同じ障害者スポーツ大会であるにもかかわらず、デフリンピックの認知度が低いことについてこれを遺憾とする感情が高まっていることにも注意を要しよう（『読売新聞』2022年4月27日朝刊、『読売新聞』2016年6月11日朝刊）。

しかしながら、このデフリンピックの知名度の問題は、情報発信、普及活動、PRといった通常の啓発活動において、聴覚障害者自身の発信には限界があることと関連している。すなわち、多数の人々を相手にしての普及、宣伝活動は、コミュニケーションの問題に直面する。手話、口話、筆談といった手法は、多数の健聴者が相手の場合、十分なコミュニケーションに困難をとまなう場合が少なくないからである。したがって、何のために知名度を上げるのかという点について、明確な理念が、他のバラスポーツ以上に必要となる。

最終的には、聴覚障害者への社会の理解を深めることが、デフリンピックの知名度を上げる真の動機であるとすれば、スポーツそのものの普及宣伝に先だって、社会的コミュニケーションの円滑化への努力こそが、まず求められねばならないとも考えられよう。すなわち、たとえば、健聴者の方での手話言語の普及活動といったことが同時に行われることがデフリンピックの知名度向上に必要といえよう。

## （6）報道関係者などとのコミュニケーションの仕方の問題

知名度向上の問題と関連して、そもそも、報道関係者とデフリンピック選手との間のコミュニケーションの態様がどうなっているかの問題がある。そこがスムーズに行われなければ、そもそも、デフリンピックについての、深く、広い報道は行われないこととなりかねないからである。

この点に関連して、デフリンピックについての報道において、そもそも、報道する側の記者と、発信する側の選手と間のコミュニケーションがどのように行われたかということ自体について、報道されているかどうかの問題がある。

多くのインタビュー記事においてはこの点についてまったく言及がないが、中には、言及のある報道も存在する（選手と地方自治体の長などとの面会についての記事や、学校での生徒と選手との交流についての記事などでは、多くの場合、「手話で」とか「手話通訳を通じて」といった、コミュニケーションの方法自体についての記述がある場合が少なくない）（『朝日新聞』2017年6月23日鳥取朝刊、『読売新聞』2017年7月14日群馬朝刊、『読売新聞』2017年9月5日朝刊）。

選手個人への報道関係者の個別インタビューにおけるコミュニケーションの仕方につ

いての具体例としては、朝日新聞石田貴子記者の三枝浩基選手（陸上）へのインタビューで「ノートとパソコンを使った筆談で取材」といった記述がある（『朝日新聞』2019年1月24日兵庫朝刊）。また、おなじく朝日新聞三嶋伸一記者の設楽明寿選手についての記事で、「手話通訳を通じて」という記述がある（『朝日新聞』2017年7月14日茨城朝刊）。しかし、そうした記述は比較的稀であり、選手からの情報入手およびその深さ、広さについて困難があるのではないか、という点についての記述はいたって少ないことがみてとれる。

他方、デフリンピック大会自体についての報道で、デフリンピックならではの点がどこまで報道されているかについてみると、たとえば、君が代の斉唱が、手話で行われたこと（『朝日新聞』2017年7月29日夕刊）、開会式の演出で、大きなスクリーンに手話通訳が映し出されたことなどの記述がみられるが（『読売新聞』2017年7月20日朝刊）、コミュニケーション問題に焦点を絞った解説はほとんどなく、今後の課題の一つであろう。

## （８）選手の意識とその変容

デフリンピック大会出場、ないしそれを目標としている選手たちの意識については、何と言っても、同じ障害を持つ者を鼓舞したい、勇気を与えたい、夢を持たせたいといった思いが強い（注10）。こうした意識は、言い換えれば、自分の努力で障害を乗り越えられることを示したいという思いであると見なすこともでき、その意味では、障害の克服を身をもって示したいという意識とつながっているといえよう（注11）。

しかしながら、デフリンピックという国際大会への参加、出場体験は、こうした選手の意識に微妙な変化を与えている兆候がみられる。

第一に、日常的なスポーツ活動においては、とにかく、戦うこと、障害を克服するという意識が先立ちやすいのに対して、非日常的体験であるデフリンピック出場にあたっては、むしろ、「楽しみたい」という意識が強く出るケースもみられる（注12）。

このことは、デフリンピックは、常に競争相手が同じ聴覚障害者であり、また、大会の運営も同じ障害者が主体となっており、いわば、聴覚障害が一般化、日常化した世界であり、多くの選手が「聴覚障害を隠そうとせず、逆にみせにきているようなオープンな姿勢」である（藤原慧選手の発言、『読売新聞』2017年7月26日朝刊）という雰囲気の影響しているともいえよう。こうした意識が強まると、障害は障害というよりも一つの個性であるという見方につながることもあり得る。この点に関して、自転車選手の早瀬久美選手は、「私は耳が聞こえないけれど、一人一人は違うことが当たり前だと受け止めています」と述べている（『読売新聞』2020年9月29日朝刊）。

加えて、デフリンピックでは、選手が国の代表として出場していることからくる意識の転換もある。すなわち、ここでは、選手は障害者ではなく、あくまで国の代表であるという意識を持つようになる（注13）。いいかえれば、ここでは、選手は障害者ではなくあくまで日本を代表するスポーツ選手となるのであった。

ここには、一つの逆説が存在する。すなわち、障害者が障害を克服し世界的大会に出場すると、選手はある意味で、一般の「障害者」から離れた存在になっていくおそれがあるということである。ただ、パラリンピック大会と若干異なり、デフリンピック大会は、聴覚障害者のアイデンティティを強化する行事でもあることから、選手の意識の「変容」は、機微な要素を含むものといえよう。

#### 注

- (1) 中島・天野（2019）で、聴覚障害者は「横方向動体視力が優れていることがわかった」とされているが、そうした能力の強化・維持にスポーツがどう役立つのかという問題もあるように思われる。また、この問題一般（平衡感覚の欠如とスポーツとの関係）については、筑波技術大学中島幸則教授の調査によれば、直立姿勢保持中に静止面へ指で軽く触れる、体性感覚入力（light touch）を行うと、聴覚障害者のバランス機能が改善するとされている。中島幸則（2016）「聴覚障害者の平衡機能評価と機能低下改善プログラムの開発」科学研究費助成事業 研究成果報告書。
- (2) 最初の五輪大会である1896年のアテネ大会では、女性参加者はゼロ、1924年のパリ大会でも4.4%に過ぎなかったと言われる。日本スポーツとジェンダー学会、2016、p.20。
- (3) Le Comité International des Sports Silencieux（略称はCISSであり、英語名は、The International Committee of Silent Sports：ICSS）「国際サイレント・スポーツ委員会」は、のちに Le Comité International des Sports des Sourds（略称はCISSであり、英語名は、The International Committee of Sports for the Deaf：ICSD）「国際ろう者スポーツ委員会」と名称を改めた。ICSD 憲章によれば、同委員会はフランス語名の頭文字である CISS と、英語名の頭文字の ICSD の両方を使用している。International Committee of Sports for the Deaf, Deaflympics Constitution, <https://www.deaflympics.com/icds.asp?constitution>（2017年10月21日取得）。本稿では特に断りのない限り「国際ろう者スポーツ委員会」のことを CISS と表記する。
- (4) この点とも関連して、各国国内のろう者のスポーツ大会への参加資格の問題もある。通常、全国大会への出場資格は比較的限定的であるが、地域レベルでは、条件が緩やかである場合が多いと言われる。これは、地域レベルでは、スポーツ行事への「参加」が重視されるが、全国レベルでは競争条件の厳格化が要求されるからとみられるが、厳格な競争条件を用いると参加資格の認定に費用がかかるといった問題や、競技団体が所属メンバーの増加をはかりたいという思惑がある場合もあるという。因みに、わが国のパラスポーツ大会及びろう者体育大会における聴覚障害者の区分は、聞こえ方による区分はされていない。補聴器の使用については、競技の上であまり有利にならないだろうという判断から、日常生活で使用しているものは使用してさしつかえないとされている。また、聴覚障害者の出場可能競技種目は、陸上（400m、スラローム、4×100mリレー、ビーンバック投を除くすべての種目）、水泳（リレー種目を除くすべての種目）、アーチェリー、卓球、フライングディスク、バレーボールであり、出場できない競技種目は、ボッチャ、ボウリング（静岡県予選には知的障害以外も出場していた）、バス

- ケットボール、車いすバスケットボール、ソフトボール、グラウンドソフトボール、サッカー、フットベースボールである。
- (5) 卓球の船越京子選手は、中学のとき、バスケットボール部に入れなかったという。『朝日新聞』2004年12月11日朝刊。
- (6) 薬剤師の資格についての自転車の早瀬久美選手のケースがある。『朝日新聞』2022年6月9日夕刊。
- (7) 同様の指摘は競泳の金持義和選手によってもなされている。『読売新聞』2017年7月4日朝刊。
- (8) 例えば、サムソン大会の日本選手団長であった山根昭治氏の発言。『読売新聞』2017年8月1日朝刊。
- (9) 具体例としては、東京で開催されたもの（『読売新聞』2022年3月27日朝刊）、横浜で開催されたもの（『読売新聞』2019年2月20日神奈川朝刊）などが報道されている。
- (10) たとえば、バレーボールの尾塚愛実選手（『読売新聞』2017年7月14日鹿児島朝刊、『読売新聞』2022年5月3日鹿児島朝刊）、水泳の金持義和選手（『読売新聞』2017年7月4日朝刊）など。
- (11) この点について、陸上競技の佐々木琢磨選手は、「自分が努力すれば障害の有無にかかわらず戦える」ことを示したいという表現で述べている。『読売新聞』2022年8月18日岩手朝刊。
- (12) たとえば、水泳の藤原慧選手は、デフリンピック大会への出場体験について「レースを楽しむ出場者を見て、まずは楽しむことが大事だと思って泳いだ」と述べている。『朝日新聞』2017年8月7日島根朝刊。
- (13) この点について早瀬久美選手は「耳の聞こえない人の代表ではなく、国民の代表 としてがんばりたい」と表現している。『読売新聞』2017年6月29日朝刊。

#### 表5の注

- 1 『読売新聞』2020年1月22日神奈川朝刊、『朝日新聞』2022年7月26日神奈川朝刊、『毎日新聞』2022年9月13日朝刊。
- 2 『読売新聞』2022年4月27日朝刊。
- 3 『読売新聞』2017年7月14日朝刊。ほぼ同じ内容の記事としては2017年8月26日『読売新聞』鹿児島朝刊がある。後者では「生まれて間もなくの診断で」とされている。
- 4 『読売新聞』2023年8月4日鹿児島朝刊。
- 5 『読売新聞』2023年8月2日佐賀朝刊。
- 6 『朝日新聞』2019年11月1日佐賀朝刊。
- 7 『読売新聞』2018年3月15日山形朝刊。
- 8 『読売新聞』2022年8月18日岩手朝刊。
- 9 『朝日新聞』2022年5月26日青森朝刊。
- 10 『朝日新聞』2017年7月14日茨城朝刊。
- 11 『毎日新聞』2018年1月6日静岡朝刊。
- 12 『朝日新聞』2017年11月28日北海道朝刊。
- 13 『朝日新聞』2021年9月2日東京夕刊。
- 14 『読売新聞』2017年7月22日朝刊。ほぼ同じ内容の記事（生後間もなく病にかかり難聴）は、『毎日新聞』2019年10月12日東京夕刊。
- 15 『朝日新聞』2017年7月26日東京夕刊。
- 16 『読売新聞』2022年7月20日島根朝刊。
- 17 『毎日新聞』オンライン版2018年8月30日、<<https://mainichi.jp/articles/20180830/k00/00e/050/260000c>>。他方、『朝日新聞』2018年6月25日朝刊では、生まれつき両耳がほぼ聞こえず、小学生のとき人口内耳をうめこむ手術をうけたが、今でも左側に補聴器をつけているとされている。

## 引用文献

- アモンズ, ドナルダ (2008) 「ろう者スポーツとデフリンピック」『一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会 HP』 <<http://www.jfd.or.jp/deaflympics/resources/presrep-j.pdf>> (2017年10月22日)
- 石川准・長瀬修 (1999) 『障害学への招待』 明石書店.
- 及川力 (1998) 「国際ろう者スポーツ委員会が国際パラリンピック委員会を離脱した要因について」『スポーツ教育学研究』 18(1), 49-54.
- 小倉和夫 (2018) 「デフリンピックの歴史, 現状, 課題及びパラリンピックとの比較」『パラリンピック研究会紀要』 8, 1-16. DOI: [https://doi.org/10.32229/parasapo.8.0\\_1](https://doi.org/10.32229/parasapo.8.0_1)
- 小倉和夫 (2023) 「【研究ノート】デフリンピック大会をめぐる課題」『パラリンピック研究会紀要』 20, 51-67. DOI: [https://doi.org/10.32229/parasapo.20.0\\_51](https://doi.org/10.32229/parasapo.20.0_51)
- 小倉和夫 (2024) 「【研究ノート】デフリンピック関連報道の内容分析と今後の課題」『パラリンピック研究会紀要』 21, 21-35. DOI: [https://doi.org/10.32229/parasapo.21.0\\_21](https://doi.org/10.32229/parasapo.21.0_21)
- 木村晴美・市田泰弘 (1996) 「ろう文化宣言—言語的少数者としてのろう者」『現代思想1996年4月臨時増刊号』.
- 五町歩美 (2010) 聴覚障害者の生涯スポーツにおける「デフスポーツ」の役割『筑波大学大学院体育系修士研究論文集』 32, 45-48.
- 齊藤まゆみ・荒川歩美 (2014) 「日本における成人聴覚障害者のスポーツ活動に対する意識とその現状」『筑波大学体育系紀要』 37, 93-99.
- 財団法人日本障害者スポーツ協会・財団法人全日本ろうあ連盟『第21回夏季デフリンピック日本選手団参加報告書』 2010年.
- 白井正樹 (2001) 「障害者文化論—障害者文化の概念整理とその若干の応用について」『社会福祉学』 42-1, 87-99. DOI: [https://doi.org/10.24469/jssw.42.1\\_87](https://doi.org/10.24469/jssw.42.1_87)
- 城間将江・鈴木恵子・小淵千絵 (2021) 『聴覚障害学 第3版』 医学書院.
- 全日本ろうあ連盟 (2014) 『第22回夏季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書』.
- 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 (2017) 「スポーツ競技における人工内耳の装用について」 <<https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/resources/aboutci.pdf>>
- 全日本ろうあ連盟 (2018) 『第23回夏季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書』.
- 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター『デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書』 2009年, <<https://www.jfd.or.jp/sc/files/deaflympics/resources/tsukuba-report.pdf>>
- 東京都オリンピック・パラリンピック準備局 (2022). 『令和3年度 国際的な障害者スポーツ大会に係る調査結果』 <[https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/seisaku/details/pdf/sportsgames\\_survey-04.pdf](https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/seisaku/details/pdf/sportsgames_survey-04.pdf)>. 内閣府 (2023) 『令和5年版障害者白書』.
- 中島幸則・天野和彦 (2019) 「聴覚・視覚障がい者のスポーツ」『知能と情報』 31(6), 165-171.
- 中村有紀 (2009) 『デフリンピック選手候補の競技環境と意識に関するアンケート調査報告書』
- 日本障がい者スポーツ協会・全日本ろうあ連盟 (2015) 『第18回冬季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書』.
- 日本スポーツとジェンダー学会 (2016) 「データでみるスポーツとジェンダー」 八千代出版.
- 日本デフゴルフ協会 (日付なし) 「理念・目的」 <<https://jdga.or.jp/about/mission/>> 2024年6月9日取得
- 藤田紀昭 (2013) 『障害者スポーツの環境と可能性』 創文企画.
- Bailey, S. (2008). *Athlete first*. John Wiley & Sons.
- Cabanel, P., & Encrevé, A. (2015). *Dictionnaire biographique des protestants français de 1787 à nos jours* (Tome 1). Les Editions de Paris.

- Groce, N. E. (1985). *Everyone here spoke sign language: Hereditary Deafness on Martha's Vineyard*, Harvard University Press.
- Séguillon, D. (2002). The origins and consequences of the first World Games for the Deaf: Paris 1924. *The International Journal of the History of Sport*, 19(1), 119-136. <https://doi.org/10.1080/714001694>
- Stewart, D. A. (1991). *Deaf sport: The impact of sports within the deaf community*; Gallaudet University Press.

# The Past and Present of the Deaflympics

OGOURA Kazuo

This article was written with the aim of providing a comprehensive explanation and evaluation of various aspects of the Deaflympics. It begins by addressing the conceptual differences between “Deaf people” and “people with hearing disabilities.” The article then explores how deafness or hearing loss affects physical activity, as well as the significance and reality of sports participation among deaf people. The article examines the challenges faced by deaf athletes, followed by an analysis of the history and current state of the International Deaflympics. It also looks at organizational issues surrounding the Deaflympics and the structure of related sports federations. Additionally, the article touches on financial constraints and difficulties in international communication in the Deaflympics. Finally, it analyzes the nature, characteristics, and problems of newspaper coverage related to athletes who participated in the Deaflympics.

## 【研究ノート】 国際手話および主要国手話の 相互比較

小倉和夫

### プロローグ

「国際手話」なるものを、異なった言語や文化をもつ国民同士あるいは民族間で、言語によるコミュニケーションが困難な場合に用いられる手振り、仕草で、お互いがその意味を理解できるものと見なすと、その源流は、西欧ではローマ帝国にまで遡るという(注1)。すなわち、皇帝ネロが異民族の王に、何が最も土産として欲しいかと尋ねると、王は、「自分の領地には多くの異なった言葉を話す人々が住んでおり、王の意思がなかなか伝わりにくいので、身振り手振りで理解させたく、ローマ帝国の著名なパントマイムの俳優を土産にもraitたい」と述べたと言われる(Brun, 1969, p.25)。

また、アメリカ大陸の先住民の部族間、あるいは、植民地として進出してきたヨーロッパ人と先住民との間で「手話」が利用されたとも言われ(Emmorey & Reilly, 1995, p.334)、そうした「手話」は、どこまで正確に意思疎通ができたかには疑問もあるが、国際的な手話の活用であったともいえる。さらには、フランスのろう者フェルディナンド・ベルチエによれば、1850年代に国際的な宴会において、各国の人たちが手話で話し合ったともいわれる(Rosenstock & Napier, 2016, p.25)。

けれども、こうした例は、特定の国ないし民族の用いていた身振りや手振りが国際的にいわば活用されたもので、共通の意思疎通の手段として相互に公式に認められた形で使用されたものではなく、その意味ではいわば自然発生的な試みであって、国際的な「共通言語」としての国際「手話」とは言い難い。

意図的に国際的な「共通言語」としていわば「作られた」かたちの「国際手話」を作る動きは、通常、1924年のサイレント・スポーツ大会に始まり、1951年の第1回世界ろう者会議において、世界ろう者連盟(World Federation of the Deaf)の下に「手話統一委員会(The Commission of Unification of Signs)」が設けられたこと、そして、1975年には英国ろう者協会が中心となって「GESTUNO: International Sign Language of the Deaf」と題する約1500の語彙からなる辞書まで作成し、世界ろう者連盟から出版さ

れたことが嚆矢と言われる。しかし、Gestuno は、国際会議で使われたものの十分な意思疎通に成功せず、一部の人々によって私的に使われるに止まったとされる。その後、デフリンピックをはじめ、国際的文化・スポーツ行事などで「国際手話」を用いる「通訳者」が登場し、次第に国際手話が「標準化」されていったとされる（Rosenstock & Napier, 2016, p.4-50, 19）（注2）。

今日デフリンピックなどで使用される国際手話と各国の手話との類似性については、英国手話に類似した面が多いとの意見もあるが（Rosenstock & Napier, 2016, p.6）、英国に限らず欧米各国の手話との類似性が高いとする見方もある。けれども、今日においても、国際手話は特別の機会に特定の人々の間で用いられるだけであり、日常、常にこれを用いる集団が存在するわけではないところに、国際手話のいわば弱点があると言えるよう。

こうした背景もあり、本論では、第一に、国際手話と日本、米国、英国、仏国の手話について、約50の日常表現における類似性を、いわば例示的に検討した。次に、アジア諸国間の手話の類似性の有無を見るために、日、中、韓三国の手話の比較を行った。なお、本稿において、日本の手話の例は日本語対应手話を取り上げている。

## 1. 国際手話と日本、米国、英国、仏国の手話の比較

まず、国際手話について、全日本ろうあ連盟発行の『Let's Try 国際手話』第1巻と2巻に収録された、約1000前後の表現のうち、日本に特有の物産、食物、地名、などを除き、比較的に日常会話でよく使用される動詞、名詞、形容詞、疑問詞を抽出し、かつ、国際比較上、各国においてその概念に大きな違いのないもので、同時に、各国（日、米、英、仏）の手話辞典における比較が容易に行える概念あるいは表現にしばり、約100余りの言語表現に対応する手話表現を比較してみた。

なお、使用した各国の手話辞典及び国際手話辞典は次の通り。

日本：全日本ろうあ連盟『わたしたちの手話学習辞典Ⅰ』、『Let's try 国際手話』編集委員会編（2019）『Let's try 国際手話』全日本ろうあ連盟、『Let's try 国際手話』編集委員会編（2020）『Let's try 国際手話2』全日本ろうあ連盟。

米国：Sternberg, M. L. A. (1998). *American Sign Language Dictionary*. Harper Perennial.

英国：British Deaf Association. (1992). *Dictionary of British Sign Language* /

*English*. Faber and Faber.

仏国：International Visual Theatre. (2009). *Le Poche Dictionnaire Bilingue: LSF/Français*. International Visual Theatre.

(1) 国際手話と主要国の手話が同じあるいはきわめて類似している例

一般的に、概念ないし事物を動作や手の動きによって容易に把握できるようなもの（言語の上では【名詞】や【形容詞】）には、各国の手話表現と、国際手話とが同一あるいはほぼ同じ場合も散見される。

- 1 【動詞】で、国際手話と日本、米国、英国、仏国の手話の形態がほぼ同じものとしては、たとえば「歩く」がある。

|    | 国際手話                                                                              | 日本手話                                                                              | 米国手話                                                                              | 英国手話                                                                              | 仏国手話                                                                               |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| 歩く |  |  |  |  |  |

図1 歩く

- 2 【名詞】で、国際手話、日本、米国、英国、仏国4ヶ国の各国手話が、ほぼ同一のものとしては、たとえば、家、鍵、体、電話などがあげられる。

|    | 国際手話                                                                              | 日本手話                                                                              | 米国手話                                                                              | 英国手話                                                                              | 仏国手話                                                                                |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 家  |  |  |  |  |  |
| 鍵  |  |  |  |  |  |
| 体  |  |  |  |  |   |
| 電話 |  |  |  |  |  |

図2 家，鍵，体，電話

3 また，【形容詞】で，国際手話，日本手話，米国手話，英国手話，仏国手話が，同一又は類似している例としては，「大きい」がある。

|     | 国際手話                                                                                | 日本手話                                                                                | 米国手話                                                                                | 英国手話                                                                                | 仏国手話                                                                                  |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 大きい |  |  |  |  |  |

図3 大きい

(2) 国際手話と，日，米，英の三ヶ国の手話が同一またはごく類似している例（すなわち仏国手話だけは別のもの）

1 【動詞】としては，「会う」「飲む」などがこれにあたる。フランスの手話には，会う「meet」にあたるものは見られないが，これには，仏語ではそもそも出会う「rencontrer」という動詞はあるが，見る「voir」との重複あるいは差異が微妙であり，英語の「meet」にぴったりあてはまる言葉を見出し難いという概念上の問題も影響しているともみられる。ちなみに仏語で面会を意味する名詞「rendez-vous」の手話表現は，国際手話の「会う」とは全く異なっている。また，「飲む」の手話表現も，日，米，英はほぼ同一であるのに対して，仏国手話は若干異なっているが，これは，フランスでは「飲む」対象として水ではなくワインを連想しているからとも考えられる。

|    | 国際手話 | 日本手話 | 米国手話 | 英国手話 | 仏国手話 |
|----|------|------|------|------|------|
| 会う |      |      |      |      |      |
| 飲む |      |      |      |      |      |

図4 会う，飲む

2 【名詞】では、「飛行機」、「部屋」などがあげられる。仏国手話の「飛行機」は、飛び上がるのではなく滑走路を走る形で表現されている。仏国手話では、そもそも日本語の「部屋」にあたる言葉としては、「piece（ピエス）、salle（サル）、chambre（シャンブル）」があるが、手話表現としては、主として寝室の意味に使われているシャンブルに対応する表現のみがあり、寝る仕草の形となっている。

|     | 国際手話 | 日本手話 | 米国手話 | 英国手話 | 仏国手話 |
|-----|------|------|------|------|------|
| 飛行機 |      |      |      |      |      |
| 部屋  |      |      |      |      |      |

図5 飛行機，部屋

（3）国際手話と日，英，仏の三ヶ国の手話は類似しているが，米国手話だけが異なっている例

【動詞】では、「行く」があげられよう。一つの推測として，米国の場合「行く（go）」が「歩く」動作よりも，車で移動することを連想しがちであるためとも考えられる。ちなみに，米国の手話には，命令の意味での「go」が別にあり，その形は，次のように，日，英，仏の「行く」の手話表現に似ており，こうした命令の「go」と区別するためもあった，「行く」という動作そのものの形は日，英，仏の手話と異なっているとも考えられる。

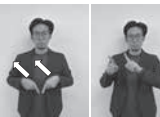
|    | 国際手話                                                                              | 日本手話                                                                              | 米国手話                                                                              | 英国手話                                                                              | 仏国手話                                                                               |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| 行く |  |  |  |  |  |

図6 行く

(4) 国際手話が日本手話とは違っているが、米、英、仏の手話とは似通っている例

- 1 【動詞】としては「入る」がある。ちなみに、日本手話の「入る」も併せて表示すると次のようになっている。

|    | 国際手話                                                                              | 日本手話                                                                              | 米国手話                                                                              | 英国手話                                                                              | 仏国手話                                                                                |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 入る |  |  |  |  |  |

図7 入る

- 2 同じような現象は、「知る」にもみられる。ちなみに、日本手話の「知る」の表現も併せて表示すると次の通り。

|    | 国際手話                                                                                | 日本手話                                                                                | 米国手話                                                                                | 英国手話                                                                                | 仏国手話                                                                                  |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 知る |  |  |  |  |  |

図8 知る

- 3 【名詞】で国際手話と米、英、仏の手話がよく似ているが、日本手話とは異なっている例としては、「女」、「警察」などがあげられる。こうした類似性は、西欧社会においては、女性は伝統的にはボンネット風の帽子をかぶるので、その帽子の紐の連想からきたものと言われている。なお、「男」については、国際手話と米国手話は、やはり帽子の連想からのもので、類似している。他方、英国、仏国の「男」についての手話は、次のように国際手話とは異なっている。また、「警察」については、国際手話と米、仏の手話は類似している。なお、英国手話は手錠を暗示するかのようになっている。

|    | 国際手話 | 日本手話 | 米国手話 | 英国手話 | 仏国手話 |
|----|------|------|------|------|------|
| 女  |      |      |      |      |      |
| 男  |      |      |      |      |      |
| 警察 |      |      |      |      |      |

図9 女，男，警察

4 「警察」の例のように，国際手話と米国および仏国手話が類似しているのに対して，英国および日本手話がこれと異なっている例としては，他に，【疑問詞】の「何」があげられる。

|   | 国際手話 | 日本手話 | 米国手話 | 英国手話 | 仏国手話 |
|---|------|------|------|------|------|
| 何 |      |      |      |      |      |

図10 何

(5) 国際手話と，日本，米国，英国，仏国のいずれの手話表現とがかなり異なっている例

これまでは，国際手話と各国の手話の類似性がどこまで，どのように観察できるかを見てきたが，多くの国際手話の表現は，日本，米国，英国，仏国のいずれの手話表現ともかなり異なっているものも少なくない。たとえば，日常用語のなかで，国際手話が，こうした各国の手話と異なっている例としては，下記のように【動詞】では，「待つ」「忘れる」，【名詞】では，「名前」「タクシー」，【疑問詞】では「いつ」などをあげることができよう。（もとより，類似性あるいは同一性は，手話の形と動きをどこまで正確に比較するかによって異なってくるが，ここでは，動作の形と印象から，類似性を判断した）。

|      | 国際手話 | 日本手話 | 米国手話 | 英国手話 | 仏国手話 |
|------|------|------|------|------|------|
| 待つ   |      |      |      |      |      |
| 忘れる  |      |      |      |      |      |
| 名前   |      |      |      |      |      |
| タクシー |      |      |      |      |      |
| いつ   |      |      |      |      |      |

図11 待つ、忘れる、名前、タクシー、いつ

## (6) 国際比較からみた手話の特徴

以上のごとく、国際手話と欧米数ヶ国および日本の手話との比較を試みてみると、各国の手話と国際手話の関係のほか、各国の手話、さらには、手話そのものにまつわる特徴ともいえるものもいくつか浮かび上がる。

一つは、指文字の問題と関連している。国際手話にもアルファベットはあるが、これは国際手話独自のものではなく、若干の微妙な違いを除いて、たとえば米国手話と同一である。こうした指文字を使うことは、欧米語を国際手話に持ち込んだので、真に国際的といえるかには疑問がある。他方、実際には、国際手話では、指文字を日常用語の一環として使うことはあまりないようである、たとえば、米国の手話ではタクシーを表現するのに、指文字の「T」をかかげながらハンドルを回す形がとられることがあるが、国際手話ではそうした表現は用いられず、手をあげて車をよぶような表現が一般的である。

また、日本手話では、「入る」の手話には、指文字で漢字の「入」をさすサインを作って示すが、そうした指文字の使用は、漢字文化特有のものといえよう。

このことは、通常の言語と手話との関係について、微妙な問題を提起する。すなわち、アルファベットのような、文字自体には意味を連想させる形がない言語とちがいで、漢字のように、文字の形態自体に意味がこめられている場合、その形を指で示すことによ

て、コミュニケーションを図ることは可能であり、たとえば、空中で、指で漢字を形づくることも一種の手話ともいえる。

このことは、言語と手話との関係について微妙な問題を提起する。そもそも、身振り手振りは、言語によるコミュニケーションにおいても、いわば、補足的に、非言語コミュニケーションの手段として用いられる。「あきれた」といいながら両手をひらく動作をすれば、その動作は、言語表現を強める、あるいは、それに一部代替する意味を持つ。いいかえれば、ある種の身振り、仕草は、言語表現と一体化している場合が少なくない。そうした身振りや仕草と手話表現との関係をどのようにとらえるかは、観念的にはある程度明確であるとしても（齊藤，2007）、実際には微妙な問題といえよう。

他方、国際手話と各国（この場合、日、米、英、仏）の手話との類似性をみるに、

国際手話と日、米、英の手話が類似するが、仏の手話が異なる

国際手話と日、英、仏が類似するが、米が異なる

国際手話と米、英、仏が類似するが、日が異なる

国際手話と米、仏が類似するが、日・英が異なる

いずれの国の手話とも国際手話は異なる

といった分類が可能であり、一概に、どの特定国の手話が国際手話に多く取り入れられているかは、限定的な数の比較ではにはわかには判断しがたい。いずれにせよ、国際手話の国際性とは何かを、改めて検討することが必要であろう。

そもそも手話は言語と異なり、仕草、身振り、手の動きによるものだけに、各国で共通あるいは類似したものも少なくなく、ろう者のなかには、デフリンピックにおいて、各国選手とのコミュニケーションはそれほど難しくなく、むしろ一体感を強めることができたとの声があることに注目すべきであろう。ある意味では、手話は、通常の言語よりも国際的に共通性があるともいえよう。

他方、各国の手話にはそれぞれの文化的、あるいは歴史的伝統や独自の生活習慣が反映されており、そうした点を国際手話が捨象した場合、国際手話自体が、文化的香りを持たない、無機質的なものとなるおそれがあることをどの程度考慮すべきかは、微妙な問題のように思われる。

## 2. 日中韓三国の手話比較

上記のような、国際手話と英、米、仏、日の手話との比較は、欧米の手話と国際手話との関連、並びに、同じ欧米圏でも、英米と仏の違いなどを浮き彫りにする上で役立つ。

他方、歴史的、文化的に深い関係のあった、日本、中国、韓国の手話の類似性を見ることは、三ヶ国の手話のなりたちを考える上でも参考となると考えられる。また、元々はいわゆる漢字に体言された概念が、手話では国別にどのように違っているか（あるいは同一であるか）を観察することは、日本、中国、韓国三ヶ国の音声言語上の類似性と、手話言語上での類似性を比較する上でも参考となろう。

日本、中国、韓国の手話言語の日常用語につき、（音声言語上の）【動詞】、【形容詞】、【名詞】につき、各々10前後の語句を以下に比較してみた（ただし、三ヶ国の音声言語自体を比較すると、たとえば、「ない」は日本語では【形容詞】であるが、韓国語の「ない」（옳다）は【存在詞】であることなどの違いがあり、音声言語を基礎にして、それに相応する手話を比較することが、三ヶ国の言語構造をこえた、文化的相違をどこまで暗示しているかについて、軽々しい判断はし難いことは念頭においておく必要があるう）。

なお、この節において用いた文献は以下のとおりである。

中国：中国盲人聋哑人协会编。（1979）. 聋哑人通用手语图 第一辑，中国盲人聋哑人协会编。（1979）. 聋哑人通用手语图 第二辑，中国盲人聋哑人协会编。（1980）. 聋哑人通用手语图 第三辑，

韓国：한국농아인협회 대구광역시협회，(2024), 참 쉬운 수어, 준커뮤니케이션즈.

### （1）三ヶ国の手話表現がほとんど同じ例

三ヶ国の表現がほとんど同じものとしては、例えば、【名詞】では「家」、「電話」、【形容詞】では「痛い」などがある。いずれの国の手話でも「家」は、両手を屋根の形にしたもので表され、また、電話は親指を耳に、小指を口にあてて電話器を想像させる形であり、国際手話と同じである。また「痛い」は、痛む場所に、軽くものを掴むような形にした右手（日本および韓国手話では5指、中国手話では親指、人差し指、中指の3指を折り曲げた型）を触らせる形が共通である。

## （２）日韓の手話がほとんど同じで、中国手話は違う形の例

他方、日韓の手話がほとんど同じで、中国手話は違う形のものとしては、例えば、次のようなものがある。

「友人」「新しい」「同じ」「忘れる」

「友人」をみると、日本・韓国の手話では、下の左図のように両手を組み合わせるが、中国手話では、両手で親指をたてた拳をつくり、それを下図右のように相互に近づける。

|    | 日本・韓国                                                                             | 中国                                                                                |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| 友人 |  |  |

図12 友人

「新しい」については、日韓は、下図左のように、甲を前に向けた両手を開きながら下げる動作であらわすが、中国手話では、下図右のように、親指をたてた右手を左手甲の上を右に滑らせる動作であらわす。

|     | 日本・韓国                                                                               | 中国                                                                                  |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 新しい |  |  |

図13 新しい

「同じ（同様）」についてみると、日韓では、下図左のように、両手の親指と人差し指を上に向けて左右に並べ、同時に指の開閉をくりかえすことで表すが、中国手話では、下図右のように右手の人差し指と中指を伸ばし前後に行き来させる。

|    | 日本・韓国                                                                             | 中国                                                                                |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| 同じ |  |  |

図14 同じ

「忘れる」という動詞の手話表現を見ると、日韓では、こめかみの脇から右手の拳をあげながら開く動作となるが、中国手話では、下図のように、額にあてた手を頭の後へ回転させる動作となる。

|     | 日本・韓国                                                                                                                                                                 | 中国                                                                                                                                                                     |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 忘れる |   |   |

図15 忘れる

### (3) 日本と中国の手話の形が同一またはごく類似しているが、韓国の手話は違う例

日本と中国の手話の形が同一またはごく類似しているが、韓国の手話は違う例としては、大きい、食べるなどがあげられる。

「大きい」については、下図のように、日本と中国の手話では、モノの大きさを象徴するように、指をやや曲げて広げた両手の掌を向かい合わせて左右に開くが、韓国手話では、韓国語で「大きい」を意味する「クン (큰)」の語頭音「ク (k)」に対応するハングル文字「ㄱ」を指文字で表した後、軽く握った拳の親指を立て、左から右へと動かす動作を加える。

|     | 日本・中国                                                                             | 韓国                                                                                 |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|
| 大きい |  |  |

図16 大きい

「食べる」については、日中では、掌を上むけた左手から右手の2指（人差し指と中指）を日元へ運ぶ動作をするが、韓国手話では、右手の掌を上に向けそれを口元へもってゆく動作となる。

#### （5）日本，韓国，中国それぞれ違う例

日本，韓国，中国それぞれ違う例は多々あるが，日常用語で興味深い例としては，「男」「女」「名前」があげられよう。

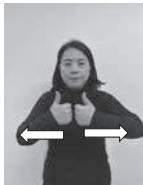
|    | 日本                                                                                  | 中国                                                                                  | 韓国                                                                                   |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| 男  |   |   |   |
| 女  |  |  |  |
| 名前 |  |  |  |

図17 男，女，名前

こうして，日，中，韓三ヶ国の手話を，（限られた日常用語についてだけであるが）

比較してみると、音声言語で同じ意味の手話が、日本と韓国では類似しているケースが少なくないことが分かる。他方、日中、中韓の間では同じ意味の手話の形が同一またはそれに近い例は少ない。

また、興味ある点の一つは、日本手話では、「入る」、「北」などの意味の手話に、各々漢字の「入」「北」を指の形で表す方式をとっているが、中国手話では、いずれも、それを意味する漢字とは全く異なった形の手話を用いていることである。他方、韓国手話では、「入る」について「入」という漢字の形は使っていないが、「北」については、日本手話に類似して（指の数に違いはあるが）漢字の「北」を連想させる形をとっている。

このように、漢字（比較的単純な形のもの）の「形」を指あるいは手を用いて表すことによって、その概念を手話で表現するというやり方が、日本、韓国、中国各々の手話においてどの程度存在するかを見ることは、手話と音声言語との関係を見る上で、有益かもしれない。

もっとも、モノについて、アルファベットの文字を指文字にして表現するものもあること（例えば日本手話ではWの指文字でウイスキーやワインを表現することや、米国手話でTを出してタクシーを表現すること）を考えると、漢字にかぎらず、アルファベットや仮名も含め、指文字の手話における機能をどのようにとらえるかという問題がそもそも存在すると言えよう（齊藤，2007，p.74-75）。

#### 注

- (1) 本来、こうした「仕草」は、言語とは区別されるべきものであるが、国際手話のなりたちとの関連では多くの関連文献がこうした過去の事例に言及していることに鑑み、ここではそれに言及した。なお、「しぐさ（ジェスチャー）」と手話の相違については、齊藤くるみ（2007）p.20 参照。
- (2) なお、Gestuno の使われ方や特徴については、齊藤くるみ（2009）参照。

#### 引用文献

- 齊藤くるみ（2007）『少数言語としての手話』東京大学出版会。
- 齊藤くるみ（2009）「視覚言語の交差点—国際手話の形成と展開」木村護郎クリストフ・渡辺克義編、『媒介言語論を学ぶ人のために』世界思想社。
- Brun, Theodore. (1969). *The international dictionary of sign language; a study of human behavior*, Wolfe.
- Emmorey, K., & Reilly, J. (Eds.). (1995). *Language, gesture, and space*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Rosenstock, R., & Napier, J. (Eds.). (2016). *International Sign: Linguistic, usage, and status issues*. Gallaudet University Press.

## **【Research Note】 “A Comparative Analysis of International Sign and National Sign Languages”**

OGOURA Kazuo

The Deaflympics are organized and operated primarily by Deaf people themselves, and as a result, international communication during the games and in their administration is conducted using what is known as International Sign. However, International Sign is not usually used within each country, where sign languages shaped by each nation's unique historical, cultural, and linguistic traditions are used.

Although International Sign is officially regarded as culturally neutral and devoid of specific national characteristics, in practice, it appears to be heavily influenced by the languages and cultural traditions of Western countries. This article seeks to demonstrate this point by comparing International Sign with British, American, and French sign languages, focusing on commonly used everyday vocabulary to examine similarities. For reference, Japanese sign language is also included in the comparison.

Furthermore, to explore the degree of similarity or difference among national sign languages influenced by their own cultural and linguistic traditions, the article also compares Japanese, Chinese, and Korean sign languages, focusing on everyday terms.

The Japanese sign language discussed in this article is Manually Coded Japanese (MCJ).

## 【付録】 デフリンピック関連資料

中村真博

|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| 1. デフリンピック 概要                     | 66 |
| 2-1. デフリンピック大会概要表 (夏季)            | 67 |
| 2-2. デフリンピック大会概要表 (冬季)            | 68 |
| 3-1. 東京2025デフリンピック 大会概要           | 69 |
| 3-2. 東京2025デフリンピック 大会エンブレム        | 70 |
| 3-3. 東京2025デフリンピック 大会マスコット        | 72 |
| 3-4. 東京2025デフリンピック ボランティア募集       | 73 |
| 3-5. 東京2025デフリンピック 協賛企業           | 75 |
| 3-6. 東京2025デフリンピック 「未来へつながるプログラム」 | 77 |
| 4. 日本国内におけるデフスポーツ統括団体一覧           | 79 |
| 5. デフリンピックとパラリンピックの大会毎の新聞記事数の推移   | 80 |
| 6. 2018年以降のデフリンピック関連新聞記事数の推移      | 82 |
| 7. デフ陸上競技の記録の比較 (2025年3月14日時点)    | 83 |
| 8. デフリンピック関連情報掲載サイト               | 85 |

## 1. デフリンピック 概要<sup>1,2</sup>



ICSD ロゴ

### (1) デフリンピック (Deaflympics) の定義

デフ (Deaf: 耳がきこえない) + オリンピック (Olympics) のことであり, 4 年毎に開催されるデフアスリートを対象とした国際スポーツ大会

### (2) 主催

国際ろう者スポーツ委員会 (ICSD)

### (3) デフリンピックの基本原則

- ・ ろうのスポーツ選手の肉体的・精神的幸福
- ・ ろう者が高レベルのスポーツ競技に参加する機会の提供
- ・ 4 年に一度のスポーツ競技会への世界中の選手の集結
- ・ 国際ろう者スポーツ委員会 (ICSD) の原則の世界への推進と, それによるろうコミュニティ中の国際親善の構築

### (4) 参加基準

- ① 「ほちよう器」などを外した状態で, きこえる一番小さな音が55dB を超えており
- ② 各国の「ろう者スポーツ協会」に登録されている選手で, 記録・出場条件を満たしている人

## 2-1. デフリンピック大会概要表（夏季）

| 回    | 開催年月日               | 開催地                   | 大会エンブレム                                                                             | 参加数 |       | 日本選手団 |      |     | 日本人選手の結果 |    |    |    | 種目数 | 競技数 |
|------|---------------------|-----------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-----|-------|-------|------|-----|----------|----|----|----|-----|-----|
|      |                     |                       |                                                                                     | 国   | 選手    | 選手    | スタッフ | 計   | 金        | 銀  | 銅  | 計  |     |     |
| 第1回  | 1924年<br>8月10日-17日  | フランス<br>パリ            |    | 9   | 148   | 0     | 0    | 0   | 0        | 0  | 0  | 0  | 31  | 7   |
| 第2回  | 1928年<br>8月18日-26日  | オランダ<br>アムステルダム       |    | 10  | 212   | 0     | 0    | 0   | 0        | 0  | 0  | 0  | 1*  | 1*  |
| 第3回  | 1931年<br>8月19日-23日  | 西ドイツ<br>ニュルンベルク       |    | 14  | 316   | 0     | 0    | 0   | 0        | 0  | 0  | 0  | 43  | 7   |
| 第4回  | 1935年<br>8月17日-24日  | イギリス<br>ロンドン          |    | 12  | 221   | 0     | 0    | 0   | 0        | 0  | 0  | 0  | 41  | 6   |
| 第5回  | 1939年<br>8月24日-27日  | スウェーデン<br>ストックホルム     |    | 13  | 250   | 0     | 0    | 0   | 0        | 0  | 0  | 0  | 44  | 7   |
| 第6回  | 1949年<br>8月12日-16日  | デンマーク<br>コペンハーゲン      |    | 14  | 391   | 0     | 0    | 0   | 0        | 0  | 0  | 0  | 51  | 9   |
| 第7回  | 1953年<br>8月15日-19日  | ベルギー<br>ブリュッセル        |    | 16  | 473   | 0     | 0    | 0   | 0        | 0  | 0  | 0  | 52  | 8   |
| 第8回  | 1957年<br>8月25日-30日  | イタリア<br>ミラノ           |    | 25  | 635   | 0     | 0    | 0   | 0        | 0  | 0  | 0  | 69  | 11  |
| 第9回  | 1961年<br>8月6日-10日   | フィンランド<br>ヘルシンキ       |    | 24  | 613   | 0     | 0    | 0   | 0        | 0  | 0  | 0  | 95  | 12  |
| 第10回 | 1965年<br>6月27日-7月3日 | アメリカ<br>ワシントン         |    | 27  | 687   | 7     | 4    | 11  | 0        | 1  | 1  | 2  | 85  | 10  |
| 第11回 | 1969年<br>8月9日-16日   | ユーゴスラビア<br>ベオグラード     |   | 33  | 1,189 | 9     | 4    | 13  | 0        | 4  | 0  | 4  | 105 | 13  |
| 第12回 | 1973年<br>7月21日-28日  | スウェーデン<br>マルメ         |  | 31  | 1,116 | 9     | 4    | 13  | 4        | 2  | 0  | 6  | 97  | 11  |
| 第13回 | 1977年<br>7月17日-27日  | ルーマニア<br>ブカレスト        |  | 32  | 1,150 | 17    | 8    | 25  | 5        | 2  | 0  | 7  | 106 | 12  |
| 第14回 | 1981年<br>7月23日-8月1日 | 西ドイツ<br>ケルン           |  | 32  | 1,198 | 33    | 11   | 44  | 7        | 4  | 2  | 13 | 110 | 12  |
| 第15回 | 1985年<br>7月10日-20日  | アメリカ<br>ロサンゼルス        |  | 29  | 995   | 52    | 15   | 67  | 8        | 5  | 2  | 15 | 96  | 12  |
| 第16回 | 1989年<br>1月7日-17日   | ニュージーランド<br>クライストチャーチ |  | 30  | 955   | 40    | 16   | 6   | 7        | 3  | 4  | 14 | 120 | 12  |
| 第17回 | 1993年<br>7月24日-8月2日 | ブルガリア<br>ソフィア         |  | 52  | 1,680 | 41    | 13   | 54  | 4        | 7  | 5  | 16 | 126 | 13  |
| 第18回 | 1997年<br>7月13日-26日  | デンマーク<br>コペンハーゲン      |  | 65  | 2,027 | 44    | 14   | 58  | 6        | 1  | 1  | 8  | 140 | 15  |
| 第19回 | 2001年<br>7月22日-8月1日 | イタリア<br>ローマ           |  | 67  | 2,208 | 60    | 26   | 86  | 10       | 5  | 5  | 20 | 143 | 15  |
| 第20回 | 2005年<br>1月5日-16日   | オーストラリア<br>メルボルン      |  | 63  | 2,038 | 102   | 33   | 135 | 3        | 7  | 1  | 11 | 147 | 16  |
| 第21回 | 2009年<br>9月5日-15日   | 台湾<br>台北              |  | 77  | 2,493 | 154   | 90   | 244 | 5        | 6  | 9  | 20 | 177 | 19  |
| 第22回 | 2013年<br>7月26日-8月4日 | ブルガリア<br>ソフィア         |  | 83  | 2,711 | 148   | 70   | 218 | 2        | 10 | 9  | 21 | 195 | 19  |
| 第23回 | 2017年<br>7月18日-30日  | トルコ<br>サムスン           |  | 86  | 2,873 | 108   | 69   | 177 | 6        | 9  | 12 | 27 | 200 | 18  |
| 第24回 | 2022年<br>5月1日-15日   | ブラジル<br>カンアス・ド・スル     |  | 73  | 2,412 | 93    | 54   | 147 | 12       | 8  | 10 | 30 | 204 | 19  |
| 第25回 | 2025年<br>11月15日-26日 | 日本<br>東京              |  | 未定  | 未定    | 未定    | 未定   | 未定  | 未定       | 未定 | 未定 | 未定 | 未定  | 21  |

\*第2回大会の競技数・種目数の記載は ICSO 公式ホームページ上 (<https://www.deaflympics.com/games/amsterdam-1928/results>) の記載に従っている。  
 出典：国際ろう者スポーツ委員会 (ICSD) 公式ホームページ (<http://www.deaflympics.com/games/>)、全日本ろうあ連盟 (2021)「デフリンピック開催地一覧」『季刊みみ (MIMI)』、No.172、pp.38-39。  
 ※ページによって記載が異なる情報に関しては ICSO 公式ホームページの記載に従う。

## 2-2. デフリンピック大会概要表 (冬季)

| 回    | 開催年月日               | 開催地                | 大会エンブレム                                                                             | 参加数 |     | 日本選手団 |      |    | 日本人選手の結果 |   |   |   | 種目数 | 競技数 |
|------|---------------------|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|-----|-----|-------|------|----|----------|---|---|---|-----|-----|
|      |                     |                    |                                                                                     | 国   | 選手  | 選手    | スタッフ | 計  | 金        | 銀 | 銅 | 計 |     |     |
| 第1回  | 1949年<br>1月26日-30日  | オーストリア<br>ゼーフェクト   |    | 5   | 33  | 0     | 0    | 0  | 0        | 0 | 0 | 0 | 5   | 2   |
| 第2回  | 1953年<br>2月20日-24日  | ノルウェー<br>オスロ       |    | 6   | 44  | 0     | 0    | 0  | 0        | 0 | 0 | 0 | 9   | 4   |
| 第3回  | 1955年<br>2月10日-13日  | 西ドイツ<br>オーベルアンメルガウ |    | 8   | 59  | 0     | 0    | 0  | 0        | 0 | 0 | 0 | 11  | 4   |
| 第4回  | 1959年<br>1月27日-31日  | スイス<br>モンタナワエルマラ   |    | 9   | 53  | 0     | 0    | 0  | 0        | 0 | 0 | 0 | 14  | 3   |
| 第5回  | 1963年<br>3月12日-16日  | スウェーデン<br>オーレ      |    | 9   | 60  | 0     | 0    | 0  | 0        | 0 | 0 | 0 | 13  | 2   |
| 第6回  | 1967年<br>2月20日-25日  | 西ドイツ<br>ベルヒテスガーデン  |    | 12  | 77  | 2     | 3    | 5  | 0        | 0 | 0 | 0 | 10  | 2   |
| 第7回  | 1971年<br>1月25日-29日  | スイス<br>アーデルボーデン    |    | 13  | 92  | 0     | 0    | 0  | 0        | 0 | 0 | 0 | 11  | 2   |
| 第8回  | 1975年<br>2月2日-8日    | アメリカ<br>レイクプラシッド   |    | 13  | 139 | 10    | 3    | 13 | 0        | 0 | 0 | 0 | 19  | 4   |
| 第9回  | 1979年<br>1月21日-27日  | フランス<br>メリベル       |    | 14  | 113 | 8     | 5    | 13 | 0        | 0 | 0 | 0 | 12  | 2   |
| 第10回 | 1983年<br>1月16日-23日  | イタリア<br>マドンナ       |    | 15  | 147 | 9     | 6    | 15 | 0        | 0 | 0 | 0 | 17  | 3   |
| 第11回 | 1987年<br>2月7日-14日   | ノルウェー<br>オスロ       |   | 15  | 129 | 10    | 4    | 14 | 0        | 0 | 0 | 0 | 18  | 3   |
| 第12回 | 1991年<br>3月2日-9日    | カナダ<br>バンフ         |  | 16  | 181 | 9     | 6    | 15 | 0        | 0 | 0 | 0 | 18  | 4   |
| 第13回 | 1995年<br>3月13日-19日  | フィンランド<br>ユッラス     |  | 18  | 258 | 9     | 5    | 14 | 0        | 0 | 0 | 0 | 15  | 3   |
| 第14回 | 1999年<br>3月8日-14日   | スイス<br>ダボス         |  | 18  | 265 | 10    | 5    | 15 | 0        | 1 | 1 | 2 | 23  | 4   |
| 第15回 | 2003年<br>2月28日-3月8日 | スウェーデン<br>スンツバル    |  | 21  | 247 | 14    | 15   | 29 | 2        | 0 | 0 | 2 | 23  | 4   |
| 第16回 | 2007年<br>2月3日-10日   | アメリカ<br>ソルトレークシティ  |  | 23  | 298 | 17    | 22   | 39 | 3        | 0 | 1 | 4 | 27  | 5   |
| 第17回 | 2011年<br>2月10日-20日  | スロバキア<br>ハイタラス     | 中止                                                                                  |     |     |       |      |    |          |   |   |   |     |     |
| 第18回 | 2015年<br>3月28日-4月5日 | ロシア<br>ハンティマンシースク  |  | 27  | 336 | 22    | 26   | 48 | 3        | 1 | 1 | 5 | 31  | 5   |
| 第19回 | 2019年<br>12月12日-21日 | イタリア<br>ヴァルテッリーナ   |  | 34  | 493 | 15    | 32   | 47 | 0        | 0 | 0 | 0 | 36  | 6   |
| 第20回 | 2024年<br>3月2日-12日   | トルコ<br>エルズルム       |  | 34  | 534 | 39    | 28   | 67 | 0        | 4 | 3 | 7 | 29  | 5   |

出典：国際ろう者スポーツ委員会 (ICSD) 公式ホームページ (<http://www.deaflympics.com/games>)、全日本ろうあ連盟 (2021)「デフリンピック開催地一覧」『季刊みみ (MIMI)』, No.172, pp.38-39.  
※ページによって記載が異なる情報に関しては ICSD 公式ホームページの記載に従う。

### 3-1. 東京2025デフリンピック 大会概要<sup>3</sup>

- (1) 正式名称：第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025  
(25th Summer Deaflympics Tokyo 2025)
- (2) 略称：東京2025デフリンピック (TOKYO 2025 DEAFLYMPICS)
- (3) 大会期間：2025年11月15日～26日 (12日間)
- (4) 参加国数 (予定)：70～80カ国・地域
- (5) 参加者数 (予定)：約6,000人 (選手約3,000人, ICSD 役員・SD・審判・スタッフ  
約3,000人)
- (6) 競技数：21競技 (陸上, バドミントン, バスケットボール, ビーチバレーボール,  
ボウリング, 自転車 (ロード・MTB), サッカー, ゴルフ, ハンドボール, 柔道,  
空手, オリエンテーリング, 射撃, 水泳, 卓球, テコンドー, テニス, バレーボ  
ール, レスリング (フリースタイル・グレコローマン))
- (7) 大会ビジョン：
  - 1. デフスポーツの魅力や価値を伝え人々や社会とつなぐ
  - 2. 世界に、そして未来につながる大会へ
  - 3. “誰もが個性を活かし力を発揮できる” 共生社会の実現

### 3-2. 東京2025デフリンピック 大会エンブレム<sup>4</sup>



#### (1) 制作者

多田伊吹氏（筑波技術大学 産業技術学部 総合デザイン学科 4年）

#### (2) 制作趣旨

- ・人々の繋がりを意味する「輪」をテーマとした。
- ・デザインはデフコミュニティの代表的なシンボルである「手」を表し、デフリンピックを通して競技と話題に触れ、互いの交流やコミュニティが「輪」のように繋がった先には、新たな未来の花が咲いていくことを表現。花は桜の花弁をモチーフとした。

#### (3) デザイン案の制作

国内唯一の聴覚障害者、視覚障害者のための大学である、国立大学法人筑波技術大学の総合デザイン学科を中心とした産業技術学部の学生がエンブレムのデザイン案を複数制作した。

#### (4) デザインの選考・決定方法

- ・都内の中高生（ろう学校を含む）の参加によるグループワークを実施
- ・グループワークでの投票によりデザインを選考し、2023年9月3日に決定

## (5) 制作までの過程

2023年 3月30日

東京2025デフリンピックの大会エンブレムを、国立大学法人筑波技術大学及び東京都と連携・協力しながら制作することが決定

2023年 4月27日

筑波技術大学の学生向けにオリエンテーションを開催することが決定

2023年 5月10日

筑波技術大学でエンブレム制作オリエンテーションが開催され、23名のきこえない学生が参加した。エンブレム制作の方針は、(1) きこえない人を制作の主役に (2) 次代を担う若者や子供たちの参画 (3) きこえない人ときこえる人が協働する

2023年 8月24日

大会エンブレムのデザイン最終候補案が3つ発表され、都内の中高生による投票で大会エンブレムを決定することが公表された

(ア)



(イ)



(ウ)



2023年 9月 3日

大会エンブレム決定

2023年11月 9日

大会エンブレムの制作動画が公開

### 3-3. 東京2025デフリンピック 大会マスコット<sup>5</sup>



東京2025デフリンピック公式マスコットゆりーと  
©東京都#（第2025-1-1号）

#### （1）公式マスコット

東京2025デフリンピック公式マスコットに、都のスポーツ推進大使である「ゆりーと」が任命された。公式マスコットは、「東京2025デフリンピック応援隊」の先頭に立って大会広報や気運醸成を行うほか、大会運営においても活躍する。

#### （2）「ゆりーと」

スポーツ祭東京2013のキャラクターとして誕生し、その後も東京都スポーツ推進大使として都のスポーツイベント等で幅広く活躍している。

#### （3）ゆりーとデフリンピックデザイン

「桜の花弁」がモチーフとなっている大会エンブレムとの統一感を生む桜色を用いたTシャツをゆりーとに着用させた。

#### （4）東京2025デフリンピック応援隊

東京2025デフリンピック応援隊は、大会を応援するキャラクター。「東京2025デフリンピック応援隊」に参加する地方自治体等のキャラクターは、各地での大会広報や気運醸成に協力するほか、デファスリートなどを応援する。2025年3月26日現在、54の応援隊メンバーが参加している。

### 3-4. 東京2025デフリンピック ボランティア募集<sup>6,7</sup>

#### (1) 募集概要

- ① 募集人数：3,000人
- ② 活動期間：2025年11月10日（月）～28日（金），原則3日間以上の活動を想定
- ③ 活動時間：1日あたり5時間～最大8時間程度
- ④ 応募要件：
  - ・2025年4月1日時点で満18歳以上
  - ・活動期間中において，日本国籍又は日本に滞在する資格を有する
  - ・各種研修への参加が可能であること
- ⑤ 募集期間：2024年11月15日（金）10:00～2025年1月31日（金）23:59
- ⑥ 応募方法：Web 応募
- ⑦ 応募単位：個人
- ⑧ 活動場所：競技会場，デフリンピックスクエア等
- ⑨ 主な活動内容：
  - ・会場における選手・観客・関係者の案内・誘導，選手等の輸送に係る誘導
  - ・各会場での運営サポート（入場者管理，会場内清掃等）
  - ・ドーピング検査補助
  - ・表彰式等の運営補助（表彰式準備，選手誘導，物品の配付等）
  - ・広報・メディアサポート
  - ・手話言語を活かした各種業務サポート
- ⑩ 提供物品等：
  - ・ボランティアウェア
  - ・ボランティア活動保険
  - ・活動日における活動場所までの交通費相当として1,000円分
  - ・活動時間に応じ，活動日における飲食費相当として1,000円分
- ⑪ 大会開催までのスケジュール
  - ・5～6月頃：会場・活動日程の連絡
  - ・6月頃～10月頃：共通研修，手話言語研修・ろう者の文化等理解研修の受講（オンライン）
  - ・8月～9月頃：役割・シフト（詳細な活動時間）等の連絡

- ・ 10月～11月頃：配置・役割別研修の受講（オンライン）
- ・ 11月10日～28日：本番時の活動

## （２） 当選結果

- ① 当選人数：3,500人
- ② 応募人数：18,903人（約5.4倍）
- ③ 年代：18～29歳（14.2%）、30～39歳（8.5%）、40～49歳（18.2%）、50～59歳（33.2%）、60～69歳（20.5%）、70歳以上（5.5%）
- ④ 性別：男性（22.4%）、女性（75.9%）、その他（1.7%）
- ⑤ 当選者の有するスキル：手話でコミュニケーションが可能（1,641人）、国際手話でコミュニケーションが可能（447人）、英語で円滑なコミュニケーションが可能（641人）

### 3-5. 東京2025デフリンピック 協賛企業<sup>8, 9, 10, 11, 12, 13</sup>

#### (1) 協賛カテゴリ

① 東京2025デフリンピック・トータルサポートメンバー

下記事業内容の全体をサポートすることを目的として、事業団に対し協賛金等の提供を行う協賛企業

② 東京2025デフリンピック・ゲームズサポートメンバー

下記事業内容のうち、特定の競技をサポートすることを目的として、事業団に対し協賛金等の提供を行う協賛企業

#### (2) 事業内容

- ・ 競技・会場の準備・運営に関すること
- ・ 開閉会式の準備・運営に関すること
- ・ 宿泊・輸送に関すること
- ・ アク্রেディテーションに関すること
- ・ 会場における警備に関すること
- ・ 飲食・会場内の清掃に関すること
- ・ 医療体制・ドーピング検査に関すること
- ・ デフリンピックスクエアの準備・運営に関すること
- ・ ボランティアに関すること
- ・ スタッフのユニフォームに関すること
- ・ 表彰式・メダルに関すること
- ・ 全国における PR 活動に関すること

#### (3) 協賛特典

- ・ トータルサポートメンバーおよびゲームズサポートメンバーは協賛金額を問わず、「大会呼称等使用」「東京大会エンブレム」「デフリンピックマーク」の使用が認められる。
- ・ 企業名やロゴ等の掲載場所・大きさ、競技観戦ガイドや競技会場内大型ビジョンへの企業広告掲載の可否・大きさ、フライヤー・試供品配布やブース出展の可否等については協賛カテゴリおよび協賛額によって異なる。

#### (4) 協賛企業一覧 (2025年3月14日時点)

##### ① トータルサポートメンバー：33社

株式会社アシックス, ソフトバンク株式会社, 株式会社ジェイ・ブロード, 株式会社 TB グループ, 東京新聞 (中日新聞東京本社), 株式会社はとバス, 株式会社光文堂インターナショナル, 株式会社ゼンリンデータコム, リオン株式会社, 住友電設株式会社, アデッソ株式会社, 株式会社ジャパンディスプレイ, 株式会社リードビジョン, 岡山放送株式会社, アマゾンジャパン合同会社, 株式会社 JTB, 株式会社読売新聞東京本社, 株式会社朝日新聞社, 株式会社 TBS ホールディングス サステナビリティ創造センター, SMBC 日興証券株式会社, ケイアイスター不動産株式会社, 株式会社アイシン, 東日本旅客鉄道株式会社, 株式会社 TOWA, 太平電業株式会社, 株式会社 INPEX, 東京地下鉄株式会社, 社会福祉法人友愛十字会, 日興アセットマネジメント株式会社, 東京メトロポリタンテレビジョン株式会社, 株式会社 Asian Bridge, 株式会社大林組, デマント・ジャパン株式会社

##### ② ゲームズサポートメンバー：9社

住友電設株式会社, 太平電業株式会社, 株式会社キャスト・ワークス, 株式会社ティーケーラボ, 富士通株式会社, えびすや土産店, 株式会社カインズ, CCCMK ホールディングス株式会社, 株式会社リコー

(参考) 東京2025デフリンピックと東京2020オリンピック・パラリンピックの双方において協賛した企業：8社

株式会社アシックス, 株式会社 JTB, 株式会社読売新聞東京本社, 株式会社朝日新聞社, SMBC 日興証券株式会社, 東日本旅客鉄道株式会社, 東京地下鉄株式会社, 富士通株式会社

### 3-6. 東京2025デフリンピック 「未来へつながるプログラム」<sup>14</sup>

#### (1) 目的

子どもたちや市民のみなさんに大会への関心を高めていただくとともに、みんなでデフアスリートや大会を応援し盛り上げていただく

#### (2) プログラムの構成

- ・教育ワークショップ型プログラム（学校向け）
- ・イベントワークショップ型プログラム（自治体向け）
- ・コンテンツ紹介（講師等の紹介）

#### (3) 【教育ワークショップ型プログラム】

##### ① 目的：

小学校や中学校で、デフスポーツやデフリンピック、きこえないことや手話言語についての授業を実施し、子どもたちの理解・関心を高めてもらうためのプログラム。ろう者やデフアスリートと交流し体験しながら学べる内容となっている。

##### ② 対象：小学校3年生～中学生

##### ③ 内容：デフスポーツ、デフリンピック、きこえないこと、手話言語等の講話や体験

##### ④ 実施方法：各学校が主体となり「総合的な学習の時間」等を活用し実施

##### ⑤ 提供可能教材：

- ・指導用資料：参考指導案，指導ガイド，ワークシート
- ・映像教材：映画「みんなのデフリンピック」，目で聴くテレビ「デフリンピック」，映像教材「みんなで応援しよう！東京2025デフリンピック」，デフリンピック啓発映像
- ・データ，冊子等：デフリンピック紹介パンフレット・チラシ，デフリンピック啓発リーフレット等のPDFデータ  
小学生向け学習コンテンツ「学ぼう！デフリンピック」  
指文字表

#### (4) 【イベントワークショップ型プログラム】

① 目的：

多くの市民が集まるイベントや施設を活用し、デフスポーツやデフリンピック、きこえないことや手話言語、ろう者の文化活動、情報保障機器などを体験してもらうためのプログラム。

② 対象：小学校3年生以上

③ 内容：デフスポーツ体験、きこえないこと・手話言語体験、ろう者の社会活動

④ 実施方法：自治体や民間企業が主体となり、主催する既存のイベントに組み込む形でワークショップや展示を実施

⑤ 提供可能教材：

- ・ イベント実施案：デフスポーツ体験プログラム、ろう者の社会活動プログラム、きこえないこと・手話言語体験プログラム
- ・ 素材：大会エンブレムデータ

#### (5) 【コンテンツ紹介】

① 目的：

教育ワークショップ型プログラムやイベントワークショップ型プログラムを実施するにあたり、その取り組みを支援するため、講師や手話通訳の派遣、体験活動等にご協力いただける団体・企業を紹介する。

② 内容：

- ・ デフスポーツに関すること：デフアスリートに講師を依頼したい（競技ごと）
- ・ きこえないことや手話言語に関すること：手話を学びたい、体験したい（都道府県ごと）
- ・ ろう者の社会活動に関すること：デフアーティストやろう者と交流したい（劇団等の団体を紹介）
- ・ 展示ブースに関すること：展示用の素材がほしい、情報保障機器の体験がしたい

#### 4. 日本国内におけるデフスポーツ統括団体一覧<sup>15</sup>

下記一覧は、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会の HP「国内の各デフスポーツ団体ウェブサイト」に記載してある団体を「東京大会実施競技」「東京大会非実施競技」「デフリンピック種目ではない競技」ごとに分類したものである。なお、表中の「－（ハイフン）」は日本国内における統括団体が存在しないことを表している。

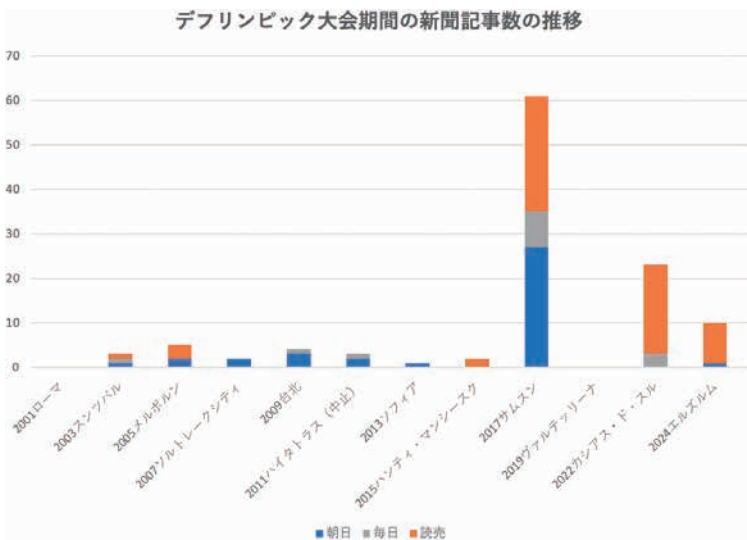
|                 | 競技名                        | 日本（2025年3月時点）                        |
|-----------------|----------------------------|--------------------------------------|
| 東京大会実施競技        | 陸上                         | 日本デフ陸上競技協会                           |
|                 | バドミントン                     | 日本デフバドミントン協会                         |
|                 | バスケットボール                   | 日本デフバスケットボール協会                       |
|                 | ビーチバレーボール                  | 日本デフビーチバレーボール協会                      |
|                 | ボウリング                      | 日本デフボウリング協会                          |
|                 | 自転車（ロード・MTB）               | 日本ろう者自転車競技協会                         |
|                 | サッカー                       | 日本ろう者サッカー協会                          |
|                 | ゴルフ                        | 日本デフゴルフ協会                            |
|                 | ハンドボール                     | 日本ハンドボール協会<br>デフハンドボール専門委員会          |
|                 | 柔道                         | 日本ろう者柔道協会                            |
|                 | 空手                         | 全日本ろう者空手道連盟                          |
|                 | オリエンテーリング                  | 日本オリエンテーリング協会正会員・<br>日本デフオリエンテーリング協会 |
|                 | 射撃                         | 日本ろう者ライフル射撃協会                        |
|                 | 水泳                         | 日本デフ水泳協会                             |
|                 | 卓球                         | 日本ろうあ者卓球協会                           |
|                 | テコンドー                      | －                                    |
|                 | テニス                        | 日本ろう者テニス協会                           |
|                 | バレーボール                     | 日本デフバレーボール協会                         |
|                 | レスリング<br>（フリースタイル・グレコローマン） | －                                    |
| 東京大会非実施競技       | クリケット                      | －                                    |
|                 | フットサル                      | 日本ろう者サッカー協会                          |
|                 | セーリング                      | 日本デフセーリング協会                          |
|                 | アルペンスキー                    | 日本ろう者スキー協会                           |
|                 | チェス                        | －                                    |
|                 | クロスカントリースキー                | 日本ろう者スキー協会                           |
|                 | カーリング                      | －                                    |
|                 | アイスホッケー                    | －                                    |
|                 | スノーボード                     | 日本ろう者スキー協会                           |
| デフリンピック種目ではない競技 | アーチェリー                     | ジャパン・デフ・アーチェリークラブ                    |
|                 | 野球                         | 日本ろう野球協会                             |
|                 | ソフトボール                     | 日本ろう者ソフトボール協会                        |
|                 | サーフィン                      | 日本デフサーフィン連盟                          |
|                 | ラグビー                       | 日本聴覚障がい者ラグビーフットボール連盟                 |

## 5. デフリンピックとパラリンピックの大会毎の新聞記事数の推移

### (1) 検索条件

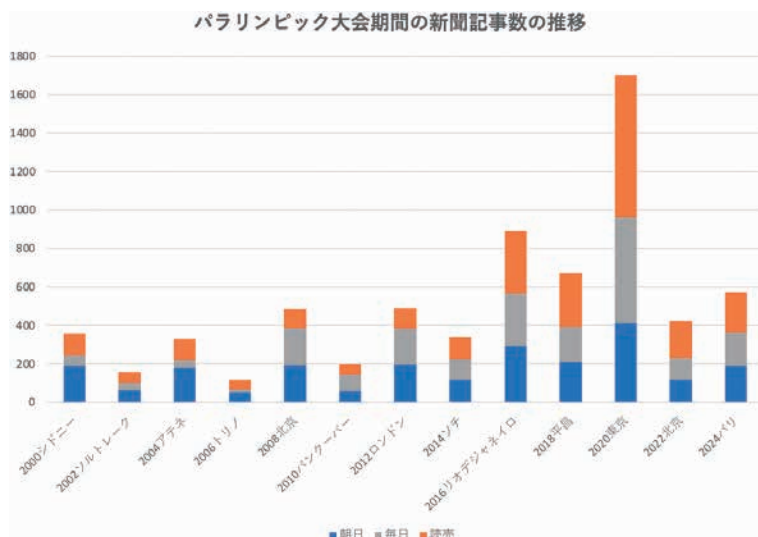
- ・ 調査期間：2000年以降のデフリンピック・パラリンピック大会開催期間の前後3日間
- ・ 調査対象新聞社：朝日新聞，毎日新聞，読売新聞（五十音順）
- ・ 新聞記事の収集方法：各社の新聞記事データベース
- ・ 検索ワード：「デフリンピック」「パラリンピック」
- ・ 検索紙面：全国紙のみ（地方版は含まない）

### (2) デフリンピック大会の新聞記事数の推移



| デフリンピック新聞記事数    | 朝日 | 毎日 | 読売 | 合計  |
|-----------------|----|----|----|-----|
| 2001ローマ         | 0  | 0  | 0  | 0   |
| 2003スンツバル       | 1  | 1  | 1  | 3   |
| 2005メルボルン       | 2  | 0  | 3  | 5   |
| 2007ソルトレークシティ   | 2  | 0  | 0  | 2   |
| 2009台北          | 3  | 1  | 0  | 4   |
| 2011ハイタトラス (中止) | 2  | 1  | 0  | 3   |
| 2013ソフィア        | 1  | 0  | 0  | 1   |
| 2015ハンティ・マンシースク | 0  | 0  | 2  | 2   |
| 2017サムスン        | 27 | 8  | 26 | 61  |
| 2019ヴァルデリーナ     | 0  | 0  | 0  | 0   |
| 2022カシアス・ド・スル   | 0  | 3  | 20 | 23  |
| 2024エルズルム       | 1  | 0  | 9  | 10  |
| 合計              | 39 | 14 | 61 | 114 |

### (3) パラリンピック大会の新聞記事数の推移



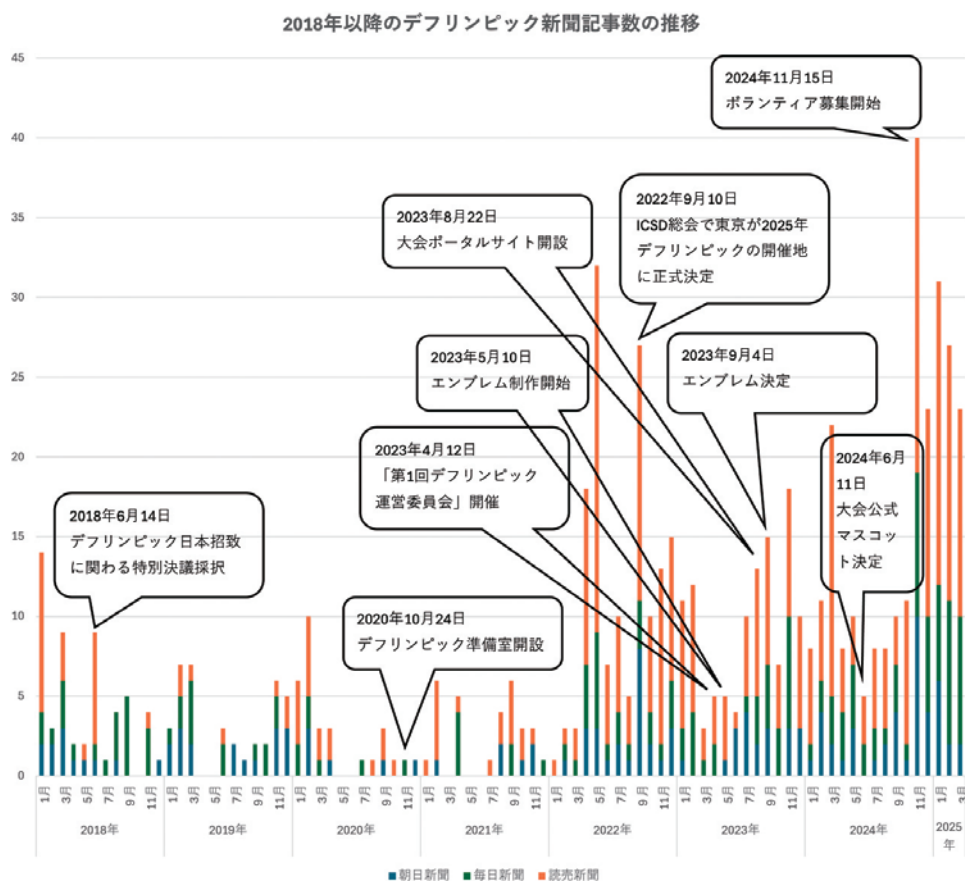
| パラリンピック新聞記事数 | 朝日   | 毎日   | 読売   | 合計   |
|--------------|------|------|------|------|
| 2000シドニー     | 190  | 55   | 113  | 358  |
| 2002ソルトレーク   | 61   | 38   | 56   | 155  |
| 2004アテネ      | 179  | 39   | 110  | 328  |
| 2006トリノ      | 50   | 15   | 52   | 117  |
| 2008北京       | 194  | 191  | 102  | 487  |
| 2010バンクーバー   | 57   | 84   | 58   | 199  |
| 2012ロンドン     | 196  | 188  | 106  | 490  |
| 2014ソチ       | 118  | 104  | 119  | 341  |
| 2016リオデジャネイロ | 291  | 276  | 324  | 891  |
| 2018平昌       | 207  | 182  | 281  | 670  |
| 2020東京       | 412  | 547  | 742  | 1701 |
| 2022北京       | 115  | 114  | 195  | 424  |
| 2024パリ       | 190  | 171  | 211  | 572  |
| 合計           | 2260 | 2004 | 2469 | 6733 |

## 6. 2018年以降のデフリンピック関連新聞記事数の推移

### (1) 検索条件

- ・調査期間：2018年1月1日～2025年3月31日
- ・調査対象新聞社：朝日新聞，毎日新聞，読売新聞（五十音順）
- ・新聞記事の収集方法：各社の新聞記事データベース
- ・検索ワード：「デフリンピック」
- ・検索紙面：地方面も含む全て

### (2) 2018年以降のデフリンピック新聞記事数の推移



## 7. デフ陸上競技の記録の比較（2025年3月14日時点）<sup>16, 17, 18, 19</sup>

### （1）デフ日本記録と世界記録，およびデフ世界記録と健常者世界記録の比較（男子）

| 男子        |          |          |                              |          |          |                              |
|-----------|----------|----------|------------------------------|----------|----------|------------------------------|
| 種目        | デフ記録     |          | デフ選手<br>の世界記<br>録と日本<br>記録の差 | 健常者記録    |          | デフ世界<br>記録と健<br>常者世界<br>記録の差 |
|           | 世界記録     | 日本記録     |                              | 世界記録     | 日本記録     |                              |
| 100m      | 10.21    | 10.59    | + 0.38                       | 9.58     | 9.95     | + 0.63                       |
| 200m      | 20.60    | 21.66    | + 1.06                       | 19.19    | 20.03    | + 1.41                       |
| 400m      | 45.29    | 47.82    | + 2.53                       | 43.03    | 44.77    | + 2.26                       |
| 800m      | 1:49.70  | 1:53.11  | + 3.41                       | 1:40.91  | 1:44.80  | + 8.79                       |
| 1,500m    | 3:47.99  | 3:54.11  | + 6.12                       | 3:26.00  | 3:35.42  | + 21.99                      |
| 5,000m    | 14:02.90 | 14:59.31 | + 56.41                      | 12:35.36 | 13:08.40 | + 1:27.54                    |
| 10,000m   | 29:07.53 | 30:53.90 | + 1:46.37                    | 26:11.00 | 27:09.80 | + 2:56.53                    |
| 110mH     | 14.04    | 15.48    | + 1.44                       | 12.80    | 13.04    | + 1.24                       |
| 400mH     | 49.10    | 55.99    | + 6.89                       | 45.94    | 47.89    | + 3.16                       |
| 3,000m障害  | 8:50.39  | 10:02.05 | + 1:51.66                    | 7:52.11  | 8:09.91  | + 58.28                      |
| 4 × 100mR | 41.10    | 41.15    | + 0.05                       | 36.84    | 37.43    | + 4.26                       |
| 4 × 400mR | 3:12.64  | 3:15.80  | + 3.16                       | 2:54.29  | 2:58.33  | + 18.35                      |
| マラソン      | 2:11:31  | 2:22:53  | + 11:22                      | 2:00:35  | 2:04:56  | + 10:96                      |
| 走高跳       | 2m20     | 2m00     | - 20cm                       | 2m45     | 2m35     | - 25cm                       |
| 棒高跳       | 5m06     | 4m63     | - 43cm                       | 6m26     | 5m83     | - 1m20                       |
| 走幅跳       | 7m94     | 7m03     | - 91cm                       | 8m95     | 8m40     | - 1m01                       |
| 三段跳       | 15m76    | 14m20    | - 1m56                       | 18m29    | 17m15    | - 2m53                       |
| 砲丸投       | 17m41    | 14m86    | - 2m55                       | 23m56    | 19m09    | - 6m15                       |
| 円盤投       | 62m16    | 62m16    | ± 0                          | 74m35    | 62m59    | - 12m19                      |
| ハンマー投げ    | 63m71    | 63m71    | ± 0                          | 86m74    | 84m86    | - 23m03                      |
| 槍投げ       | 73m47    | 69m15    | - 4m32                       | 98m48    | 87m60    | - 25m01                      |
| 10種競技     | 7,964点   | 5,470点   | - 2,494点                     | 9,126点   | 8,308点   | - 1,162点                     |

(2) デフ日本記録と世界記録, およびデフ世界記録と健常者世界記録  
の比較 (女子)

| 女子        |          |          |                              |          |          |                              |
|-----------|----------|----------|------------------------------|----------|----------|------------------------------|
| 種目        | デフ記録     |          | デフ選手<br>の世界記<br>録と日本<br>記録の差 | 健常者記録    |          | デフ世界<br>記録と健<br>常者世界<br>記録の差 |
|           | 世界記録     | 日本記録     |                              | 世界記録     | 日本記録     |                              |
| 100m      | 11.68    | 12.37    | + 0.69                       | 10.49    | 11.21    | + 1.19                       |
| 200m      | 24.43    | 25.92    | + 1.49                       | 21.34    | 22.88    | + 3.09                       |
| 400m      | 55.35    | 58.56    | + 3.21                       | 47.60    | 51.75    | + 7.75                       |
| 800m      | 2:07.50  | 2:14.37  | + 6.87                       | 1:53.28  | 1:59.93  | + 14.22                      |
| 1,500m    | 4:25.25  | 4:41.22  | + 15.97                      | 3:49.04  | 3:59.19  | + 36.21                      |
| 3,000m    | 9:40.10  | 9:46.53  | + 6.43                       | 8:06.11  | 8:34.09  | + 1:33.99                    |
| 5,000m    | 16:23.27 | 17:46.97 | + 1:23.70                    | 14:00.21 | 14:29.18 | + 2:23.06                    |
| 100mH     | 13.19    | 14.45    | + 1.26                       | 12.12    | 12.69    | + 1.07                       |
| 400mH     | 1:00.22  | 1:03.39  | + 3.17                       | 50.37    | 55.34    | + 9.85                       |
| 4 × 100mR | 47.05    | 50.12    | + 3.07                       | 40.82    | 43.33    | + 6.23                       |
| 4 × 400mR | 3:48.14  | 4:15.92  | + 27.78                      | 3:15.17  | 3:28.91  | + 32.97                      |
| マラソン      | 2:46:07  | 2:53:56  | + 7:49                       | 2:16:16  | 2:18:59  | + 29:51                      |
| 走高跳       | 1m80     | 1m60     | - 20cm                       | 2m10     | 1m96     | - 30cm                       |
| 棒高跳       | 3m45     | 3m60     | - 15cm                       | 5m06     | 4m48     | - 1m21                       |
| 走幅跳       | 6m24     | 5m27     | - 1m03                       | 7m52     | 6m97     | - 1m18                       |
| 三段跳       | 13m63    | 10m79    | - 2m84                       | 15m74    | 14m16    | - 2m11                       |
| 砲丸投       | 15m33    | 13m47    | - 1m86                       | 22m63    | 18m22    | - 7m30                       |
| 円盤投       | 58m54    | 30m79    | - 27m75                      | 76m80    | 60m72    | - 18m26                      |
| ハンマー投げ    | 70m59    | 54m61    | - 15m98                      | 82m98    | 70m51    | - 12m39                      |
| 槍投げ       | 51m30    | 46m20    | - 5m10                       | 72m28    | 67m38    | - 20m98                      |

## 8. デフリンピック関連情報掲載サイト

| HP・団体名                                               | 内容・URL                                                                                                                                                                            |
|------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| デフリンピック                                              | デフリンピックの公式 HP。                                                                                                                                                                    |
|                                                      | <a href="https://www.deaflympics.com/">https://www.deaflympics.com/</a>                                                                                                           |
| 国際ろう者スポーツ委員会 (ICSD)                                  | デフリンピックや世界ろう者選手権大会など、きこえない・きこえにくい人のスポーツとその競技大会を統括、運営する団体。                                                                                                                         |
|                                                      | <a href="http://www.ciss.org/">http://www.ciss.org/</a>                                                                                                                           |
| 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会                                      | 日本のデフスポーツを統括する団体。                                                                                                                                                                 |
|                                                      | <a href="https://www.jfd.or.jp/sc/">https://www.jfd.or.jp/sc/</a>                                                                                                                 |
| 東京2025デフリンピック大会ポータルサイト                               | 東京2025デフリンピック大会組織委員会が運営するポータルサイト。                                                                                                                                                 |
|                                                      | <a href="https://www.deaflympics2025.com/">https://www.deaflympics2025.com/</a>                                                                                                   |
| TOKYO FORWARD 2025                                   | 東京都が運営する2025年に東京で開催される国際大会（世界陸上、デフリンピック）に関する情報を掲載しているサイト。アスリートや関係者に関する情報も掲載されている。                                                                                                 |
|                                                      | <a href="https://www.tokyoforward2025.metro.tokyo.lg.jp/">https://www.tokyoforward2025.metro.tokyo.lg.jp/</a>                                                                     |
| スポーツTOKYO インフォメーション「TOKYO FORWARD 2025 世界陸上・デフリンピック」 | 東京都が運営する2025年に東京で開催される国際大会（世界陸上、デフリンピック）に関する情報を掲載しているサイト。                                                                                                                         |
|                                                      | <a href="https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/tokyo-forward2025/">https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/tokyo-forward2025/</a>                               |
| 全日本ろうあ連盟「デフリンピック2025 日本開催に向けた取り組み」                   | 全日本ろうあ連盟が実施する東京2025デフリンピック開催に向けた取り組みを掲載しているサイト。                                                                                                                                   |
|                                                      | <a href="https://www.jfd.or.jp/deaflympics2025">https://www.jfd.or.jp/deaflympics2025</a>                                                                                         |
| 福島県「東京2025デフリンピックサッカー競技が福島県で開催されます！」                 | サッカー競技の会場である福島県に関連するデフリンピック情報が掲載されているサイト。                                                                                                                                         |
|                                                      | <a href="https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/fsad2011/tokyo2025-deaflympics.html">https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/fsad2011/tokyo2025-deaflympics.html</a>                 |
| 静岡県「東京2025デフリンピック自転車競技の静岡県開催について」                    | 自転車競技の会場である静岡県に関連するデフリンピック情報が掲載されているサイト。                                                                                                                                          |
|                                                      | <a href="https://www.pref.shizuoka.jp/kankosports/sports/sports-shinkou/1057344/index.html">https://www.pref.shizuoka.jp/kankosports/sports/sports-shinkou/1057344/index.html</a> |
| デフスポータル                                              | デフスポーツの総合ポータルサイト                                                                                                                                                                  |
|                                                      | <a href="https://deafsportal.com/">https://deafsportal.com/</a>                                                                                                                   |

注

- 1 <https://deaflympics2025-games.jp/main-info/about-deaflympics/>（最終閲覧日：2025年3月30日）
- 2 <https://www.jfd.or.jp/sc/deaflympics/games-regulations>（最終閲覧日：2025年4月3日）
- 3 <https://deaflympics2025-games.jp/main-info/about/>（最終閲覧日：2025年4月11日）
- 4 <https://www.deaflympics2025.com/brand/emblem>（最終閲覧日：2025年3月26日）
- 5 <https://www.deaflympics2025.com/brand/mascot>（最終閲覧日：2025年3月26日）
- 6 <https://www.sports-tokyo-info.metro.tokyo.lg.jp/tokyoforward2025/deaflympics2025-volunteer/>（最終閲覧日：2025年4月11日）
- 7 <https://deaflympics2025-games.jp/main-info/volunteer/>（最終閲覧日：2025年4月11日）
- 8 <https://deaflympics2025-games.jp/participation/membership/>（最終閲覧日：2025年4月11日）
- 9 [https://deaflympics2025-games.jp/participation/membership/docs/deaf\\_membership\\_guidelines.pdf](https://deaflympics2025-games.jp/participation/membership/docs/deaf_membership_guidelines.pdf)（最終閲覧日：2025年4月11日）
- 10 [https://deaflympics2025-games.jp/participation/membership/docs/deaf\\_membership\\_list.pdf](https://deaflympics2025-games.jp/participation/membership/docs/deaf_membership_list.pdf)（最終閲覧日：2025年4月11日）
- 11 [https://deaflympics2025-games.jp/participation/membership/docs/deaf\\_membership\\_benefits\\_2412.pdf](https://deaflympics2025-games.jp/participation/membership/docs/deaf_membership_benefits_2412.pdf)（最終閲覧日：2025年4月11日）
- 12 [https://deaflympics2025-games.jp/participation/membership/docs/250314\\_JP\\_Sponsor\\_List.pdf](https://deaflympics2025-games.jp/participation/membership/docs/250314_JP_Sponsor_List.pdf)（最終閲覧日：2025年4月11日）
- 13 <https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/a11909fc772568a51b8df7ab9bfe3569.pdf>（最終閲覧日：2025年4月11日）
- 14 <https://www.deaflympics2025.com/mirai>（最終閲覧日：2025年4月11日）
- 15 <https://www.jfd.or.jp/sc/sportsassoc>（最終閲覧日：2025年4月19日）
- 16 <http://www.ciiss.org/athletes/records>（最終閲覧日：2025年3月14日）
- 17 [https://www.j-daa.or.jp/jdaa/wp-content/uploads/2025/03/2024\\_%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%83%87%E3%83%95%E8%A8%98%E9%8C%B2\\_20250305.pdf](https://www.j-daa.or.jp/jdaa/wp-content/uploads/2025/03/2024_%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%83%87%E3%83%95%E8%A8%98%E9%8C%B2_20250305.pdf)（最終閲覧日：2025年3月14日）
- 18 <https://worldathletics.org/records/by-category/world-records>（最終閲覧日：2025年3月14日）
- 19 <https://www.jaaf.or.jp/record/japan/?segment=1&all=1>（最終閲覧日：2025年3月14日）

## 執筆者（掲載順）

齊藤 まゆみ

筑波大学体育系 教授

小倉 和夫

日本財団パラスポーツサポートセンターパラリンピックリサーチチーム 代表

独立行政法人国際交流基金 顧問

青山学院大学 特別招聘教授

中村 真博

日本財団パラスポーツサポートセンターパラリンピックリサーチチーム 研究員

常葉大学教育学部生涯学習学科 助教

## Authors (listing order)

SAITO Mayumi

Professor, Institute of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

OGOURA Kazuo

Senior Director, The Nippon Foundation Para Sports Support Center

Senior Advisor, The Japan Foundation

Guest Professor, Aoyama Gakuin University

NAKAMURA Masahiro

Research Fellow, The Nippon Foundation Para Sports Support Center

Assistant Professor, Major of Lifelong Sport, Department of Lifelong Learning,

Faculty of Education, Tokoha University

---

日本財団パラスポーツサポートセンター  
パラリンピック研究会 紀要 第24号

2025年6月発行

発行者 日本財団パラスポーツサポートセンターパラリンピック研究会  
〒107-0052 東京都港区赤坂1-3-5 赤坂アビタシオンビル4階  
電話：03-5545-5991 Fax：03-5545-5992  
URL: <http://para.tokyo/>

---

Journal of Paralympic Research Group Vol. 24

Published in June 2025

Publisher The Nippon Foundation Para Sports Support Center  
1-3-5-4F, Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan  
Tel: +81-(0)3-5545-5991 Fax: +81-(0)3-5545-5992  
URL: <http://para.tokyo/english>

---

ISSN 2758-1578



Journal of Paralympic Research Group

Vol.24

June 2025